

大阪学院大学
外国語論集
第73号

恋の病の魔物払い

アルフィアン・サアットの“The Electric Ghazals”を読む

…………… 長岡 みゆき 1

「韓語覚書」の朝鮮語かな表記について

— 子音について —

…………… 金 文 姫 23

suddenly考 (2)

…………… 黒宮 公彦 49

平成 29 年 6 月

大阪学院大学外国語学会

大阪学院大学
外国語論集
第73号

平成 29 年 6 月

大阪学院大学外国語学会

恋の病の魔物払い アルフィアン・サアットの “The Electric Ghazals”を読む

長 岡 みゆき

はじめに

アルフィアン・サアット（1977-）は、多民族・多言語国家シンガポールにおいて、英語を表現手段として短編小説、戯曲、詩を書くマレー系作家である。どのジャンルの作品においても、周縁的—民族、経済、性志向などにおいて—立場からシンガポールの「成功の大いなる物語」に対する疑義を表明しており、そのため一般に彼は反体制的と目されている。詩作品においても、唯一この地域土着の民族であるにもかかわらずこの国の経済的・文化的グローバリズムの中で忘却の霧の中に消されてしまいそうな、マレー民族と文化の代弁者というペルソナを通して民族の主題を修辞効果を狙った声で語る、いわば公共的な主題のものが際立っており、選集などによく収録され評論で言及されるのもそういった作品だ。¹だが民族の主題が表面から消え、詩人個人の問題を抒情的な声で詠ったものがある。

その詩は *A History of Amnesia*（『記憶喪失の歴史』2001）収録の “The Electric Ghazals”（「電撃のガザル」）である。ガザル詩は7～8世紀アラビアを起源としてペルシャ、インド、パキスタンに広がり、13～4世紀にペルシャでルーミー、ハーフィズなどの詩人により黄金期を迎えた、主として恋愛、憧れ、憂愁、形而上的問題を主題とする抒情詩である。その詩型の特徴は、5～15程度の二行聯句から成っていること、それぞれの聯は主題的に感情的に独立していること、最終聯において詩人自身が一人称または三人称で顔を覗かせることである。²現代英語圏でもこの詩型は活用されており、アルフィアンはア

ドリエンヌ・リッチ (Adrienne Rich 1929-2012) のそれに触発されたと筆者に語ったが、その具体的な影響関係についてここで論じる用意はない。『ガザル』(以下、アルフィアンのガザル詩全体をこのように、個々のものを「ガザル」と表記する。)に詩人自身が付けた註に、彼にとって魅力的なこの形式の特長として、「一つの二行聯句から別のものへの題材の唐突な、ややもすると乱暴な飛躍」、それに「最終聯で、しばしば自賛、自嘲、さらには自省という形で作者自身について語ること」の二つを挙げている。(Alfian 2001, 86) 先走って言えば、ガザル詩型の緩やかな形式性が言葉にならぬ心的素材を整序することを助け、またその自立的断片性が意識下の中に渦巻く雑多な要素を組み入れることを、それでいて最終聯での作者への言及がそれらを統一するかもしれない主体を渾沌のなかに垣間見させることを、可能にしているといえるだろう。もとより言葉は渾沌の世界を切り分け整序するもので、それが分節だ。そしてこの「世界」には私たちの内部世界も含まれる。アルフィアンは『ガザル』において、この詩型を用いて彼のどういう内部世界を整序しようとしているのか。なお、引用は適宜原語あるいは日本語で行なう。

1

『ガザル』は12篇の、どれも6聯の二行聯句の「ガザル」から成っている。韻律は特に定まらず、押韻も排されている。各「ガザル」には“Ghazal of XX”と題が付けられており、それらは1から12まで順に“Oblivion”、“Equanimity”、“Death”、“Love”、“Jealousy”、“Happiness”、“Sorrow”、“Hope”、“Pain”、“Light”、“Emptiness”、“Compassion”である。抽象性の高い名詞が殆どで、哲学的、人生論的内容を予想してしまう。実際、箴言めいた詩行にしばしば出くわす：

To wake up is to break these cobwebs on our bodies. [1]

Meditate on one word only, and all troubles will cease. [2]

The beautiful ones are so much easier to forgive. [9]

To choose to be alone is to choose abandonment. [12]

([] 内の数字は「ガザル」番号)

『ガザル』は詩人20代前半の作品であり、それは死や愛や嫉妬といった生きる上での問題に対する解答を若いなりに模索するという、無垢から経験への精神の軌跡を示していると予想される。であるとすれば、そういう問いを詩人に立てさせ分節・言語化させた経験の渾沌の核心にあるのは何なのか。哲学的、人生論的命題は一般論であるから現在形で表される。一般的真理、社会通念、諺は現在形で表すとはどの英語の教科書にもある。それに対して、個別的、具体的経験は、時の中に生きる私たちであるから、当然、過去形で分節せざるをえない。ところが『ガザル』においては、過去形が極めて少ない。この点に着目し、時制とりわけ過去形という分節の実例を検討することにより経験の核心を探り、『ガザル』を読み解きたい。精神の軌跡の窺えるテキストであるから、概ね線条的に議論を進め、語り手を主人公とした物語を読み取ることになる。

過去形の使用数をいうなら、他の「ガザル」では0～4であるのに対して、第7「悲しみのガザル」と第10「光のガザル」では8と、断然多い。また先走ることになるが、前者は悲しみを知らぬ—共感を知らぬ—相手との恋の裂け目を提示し、後者はその恋を反省的に総括するもので、どちらも語り手にとって経験の核である恋を扱ったものである。そうした経験をとおして得た人間関係についての洞察、生きて行く上での指針を扱った最終の「共感のガザル」には、当然ながら過去形は現れない。具体的な検討は、まず第5「嫉妬のガザル」から始めたい。それは、語り手の恋病の今現在を謂わばリアル・タイムで描写してドラマの一場面を見せるようで、また時制の観点からも興味深いからだ。アルフィアンのガザル詩型の具体例としてこの詩の全体を引用しておく：

For Winnie

I want to know how you slept with him, the way you held him.

Every crevice through which my shadow may ink itself.

The more I tell you of my happiness, the more unhappy I am.
That you are not part of it, that you do not covet it for yourself.

Green eyes, green fingers, of the evergreen forest.
Between the foliage are thorns, and they too do not die.

Oh, I would have swept it all cleanly, with one gesture of the hand.
If I had not seen his hand in mine, sweeping the hair over your eye.

The plates are shattering, the wind speed-reading my notebooks.
And only my cultivated numbness could perceive it all as music.

Let it go, Alfian, for surely you are too large for their world.
You will never find your balance on the isthmus between their lips.

見てのとおり複数の時制が混在している。「皿」と「帳面」についての現在進行形が、語り手の今現在を示している。外部と内部のこの混乱の原因は、“you slept with him . . . you held him” からわかるように、恋人の裏切りだ。それを語り手は「手のひと振りできれいさっぱり払いのけもできただろうに」、できなかった。そのことは未練氣に仮定法で表現されており、直説法過去できっぱりと分節されるに至っていない。4聯目までの二人称は男性とも女性ともとれるが、後述するように、恋人は男性で、ゲイの三角関係である。幸福を分かち合いたいという第3－4行から、語り手の期待している恋人との関係の質が推察される。それは肉体的のみならぬ精神的合一だ。最終聯で、ガザル形式に忠実に、詩人自身が登場する。そこでは、恋人とその相手は “their

world”、“their lips”と、二人称ではなく三人称で言及されており、語り手は自分から遠い存在として恋人とその同類とを分節している。そして自賛という形で自らを慰め励まして締めくくっている。

直前の第4「愛のガザル」では恋の成就の手前の幸福な状態が詠われている。使われているのは主として現在形と現在進行形である。その冒頭の二聯：

Inside this body another one is leaning.
Under these eyes another pair is gazing.

A universe simpler than the design of a seed.
One star rules its galaxy, in its sky only one constant bird.

ここでも、ひとつであること、合一が強調されているが、それは語り手の独りよがりの夢想らしい。というのは最終聯に “What will you do, Alfian, when he opens the door. / When he surrenders the key into the hands of the beloved?” とあり、恋がまだ成就していないことが明らかであるからだ。相手の方は「この体の中にもう一つが寄りかかっている」とは思っていないかもしれない。第2聯からは動詞が消えており、合一という主観的願望を、名詞立てによって自分の外の世界に理想として北極星のように凝結させている。

注目したいのは第4聯 “Only in my dreams [do] his feet touch the ground. / When I smile for no reason, it is he who etches the dimples” だ。恋人は「僕の夢の中でだけ地上に降りてくる」、現実においては手の届かぬ神々しいような存在で、語り手を支配してもいる。相手に対する語り手の天上的憧憬が窺われる。これは重要な点で、後に改めて検討する。

この「ガザル」では、恋人は “he” および “his” として男性三人称で言及されており、相手が男性であることは明らかだ。語り手の同性愛志向は、実は第1「忘却のガザル」に仄見えている。形式に従って詩人自身が顔を出すその

最終聯は次のようになっている：

Alfian, remember that pale dawn after a night at the playground?

You brushed sand off your body as if you were a cracked hourglass.

使われているのは過去形だ。“playground”は公営団地内の遊び場と想像され、子供がそこで一晚過ごすということは考えにくいから、これはもっと後年の経験を指しているのに違いない。また、遊んだ後で「砂を払い落とす」というなら、“off the body”（体の砂を）よりは“off the clothes”（衣服の砂を）の方が自然だろう。かつ、語り手自身が「罅割れた砂時計みたいに」なった、即ち傷つけられたと感じている。さらに、男性の同性愛行為が犯罪となりうるシンガポールでは、公園、ジム、サウナ、商業施設のひと気ない裏階段の踊り場などが、彼らの出会いの場となることがよくある。³以上のことを考え合わせ、ここに暗示されているのは、若い頃の童貞喪失の出来事と考えられる。「忘却」の淵に沈めてしまうことのできぬ始原的な決定的経験だ。

2

全体として満ち足りた気分が流れる第6「幸福のガザル」だが、その中に不協和を醸す二行がある：

That lipstick smeared across your cheek made me laugh.

Yet it happened when you tried to erase your own laughter. (5-6)

「口紅」とあるところからすると、恋人は女性と浮気をしたらしい。語り手は笑い飛ばしたが、恋人は押し黙るという形で自らの裏切り行為を認める。その出来事はあったこととして過去形で表されており、取るに足りぬとしてそれを赦す心の余裕を語り手が獲得していることがここからわかる。同時に、二人の間

に合一ではなく裂け目が生じたこともわかる。次の聯 “The silhouette of a cartwheel, an ice cream bell. / All these even when I have turned my back” は、語り手が恋人との合一という幸福の幻影を捨て、「背を向け」ている間に浮気をする相手と違って確かな外界の与える幸福に目を転じつつあることを示している。

第7「悲しみのガザル」において、その裂け目は一層明らかになる。

The rain stammering its ecstasy on the roof.

So was it squandering its quota of joy?

My lassitude, not love, brought me to your shoulder.

The absence of light made me move towards the solid.

Second sadness: he who could not remember his sorrowful dream.

A third: he remembered it, but did not know why there were tears. (1-6)

現在分詞 “stammering” は、読者を今現在に置くと同時に、第2行目と違って be 動詞の欠如ゆえに無時間の世界へ投げ込み、描かれた事象を終わったこととして凝結させる。「どもる」と分節されているから、その事象は否定的なことと捉えられていることがわかる。次行の接続詞 “So” は結果ではなく結論あるいは要約を意味し、日本語を充てるなら「してみると」、「じゃあ」がふさわしいだろう。“ecstasy” は “ex-stasis” 即ち自己の外に立つ忘我の状態を意味し、また、降り注ぐ雨は精液を想像させることから、性的合一を暗示する。そして「割り当て分」はその悦びに限りがあることを暗示している。また、それが使い果たされてしまったことが過去進行形の疑問形で分節されていることに、語り手の諦め切れなさが窺える。もはや「愛」の「幸福」や悦びはなく、在るのは “lassitude” (倦怠) であり、恋人は統一的人格をもつ存在で

なく “shoulder” (肩) という単なる肉体の断片に矮小化されて分節されている。語り手と恋人とのこの断絶の原因は第3聯に暗示されている。恋人は「悲しみ」を知らぬ人間であるというところに二人の相容れなさがあるようだ。悲しみを分かち合い苦しみを共にすること — その意味での共感 (“compassion”) — は、幸福を共にすることより難しいのかもしれない。第4、第5聯には、街の “edges” (縁)、を “sharpen” (尖らせる) する夜明け、“stone-coloured light” (石色した光)、“rasping of birds” (鳥どもの嘎れ声)、“piercings in the earlobes of the drowned child” (溺死した子供の耳たぶのピアス)、“tinkling anklet unearthed at the site of the crash” (墜落現場で掘り出されちりと鳴るアンクレット) と、読み手の身体に刺さるようなイメージが積みかけられる。「悲しみ」というより、既に「痛み」(第9「ガザル」の題) というのがふさわしい感覚である。語り手の傷ついた心身を想像させる。

次に進む前に指摘しておきたいことがある。先に触れたように、「エクスタシー」は勿論人間の次元での心身合一を指すが、それが「雨」即ち天より来るものと関係づけられている。ゼウスが黄金の雨(精液)となって人間の娘ダナエと合一を果たすという神話的想像力が思い起こされ、第4「ガザル」においてと同様に、ここでも恋人に対する語り手の天上的憧憬が窺える。そしてこのことの是非は第10「光のガザル」で検証されることになる。

第8「希望のガザル」において、“Two wild flowers yesterday and suddenly: seven today” そして “take heart: you have not robbed your future of joy” と悲しみからの立ち直りが示された後、第9「痛みのガザル」は箴言めいた二行で始まる。

The beautiful ones are so much easier to forgive.

How often we peel cruelty off them like masks.

現在形は、人は美しい人間に対しては容易に寛容になってしまうことを一般的

事実として、語り手が納得していることを暗示している。ところが第2聯に
 “What is this scent that brought me to your door?” と、単数一人称と二人称と
 を伴って唐突に過去形が現れる。(失) 恋の経験を一般的事実として箴言めい
 た言葉に封じ込めたにもかかわらず、語り手は未練がましく恋人の戸口に立
 つ。一般的事実を表す現在形に分節しきれぬ想いがその行為をさせる。そして
 その想いを呼び起こすのが「匂い」だ。恋人の身体から放出されて語り手の記
 憶にまわりつく「匂い」。

この断ち切りきれぬ心の揺れを言語上で断ち切ろうとする努力は、続く二聯
 の代名詞に窺える：

Mark those eyes: gleam of an unthreaded needle.

Meant not for the wound's edges but its weeping center.

In their world, it comes with illness, an injury.

And as for us: a torn photograph, that courageous smile. [下線筆者]

第4「ガザル」では、相手（とその同類）を遠い存在として三人称で言及して
 おり、それは自らを鼓舞するためだと先に述べたが、ここでは彼我の違いは、
 彼らを殆ど断罪するように、また傷ついた心を押し殺しての笑顔は過去のこと
 (“that”) として、明確に分節、対象化される。そして最終聯では “it was not
 us who were meant for suffering. / These blows were intended for the one
 sleeping within” と、「打撃」は確かにここにある (“these”) にもかかわらず
 「苦しみを耐え忍ぶべきは自分たちのような人間ではなく、目覚めた心をもた
 ん奴の方だった」のだと、言語上で立場を逆転させており、強調構文はその逆
 転の効果を強めている。だがそこに語り手が自らを納得させようとしての強が
 りを窺わせもする。言葉として外に出してしまえば、反事実も一人歩きして事
 実となるかもしれないからだ。

3

他の「ガザル」の題名が全て人間（の心）にかかわる語であるのに対して、第10「ガザル」のそれは“Light”で、自然現象にかかわるものとなっている。第1聯～第3聯は、木々に照りつける太陽の光、雲間の光、水に入射して歪む光線などの、「粒子あるいは波動として」の「光のふるまい」という、人間関係を超越した領野についての一般論が語られる。当然ながら現在形が用いられている。しかし第4聯には、またしても突然、過去形が現れる：

Yellow light of day, was it you who plotted this moment?

Silver light of night: was it you who drafted this memory?

昼の光がある経験の意味を明らかにする機会を提供し、夜の光がその経験の記憶を蘇えらせる、その経験が何であるかは第5聯で暗示される：

It was the flame that was attracted to the moth.

And so it offered itself: union in annihilation.

過去形で語られていること、また定冠詞が用いられていることから、この「飛んで火に入る夏の虫」現象は普遍的自然現象ではなく、一回限りの過去の出来事を指すと考えられる。自然現象においては、蛾が炎に引かれると捉えるのが妥当だ。⁴ここでの恋の現実においては、見てきたように惹かれていたのは語り手であるから、語り手が蛾に当たる。しかし上の聯においては、主語が入れ替えられており、さらに強調構文まで使われて、引／惹かれることの始原を炎／恋人に見ている。ここで語り手は、蛾が炎に引き寄せられる自然界の現象と自分が恋人に惹かれる恋の現実とを、主語の入れ替えと強調構文という言語上の操作によって逆転させ、現実から自立した世界—しかも反事実—を作り出している。一方的な恋の経験を記憶の闇から引きずり出し光に曝して力わざ

で分節することによって、仕掛けたのは相手であると自らを納得させている。そうして恋人を非難する一方で称揚してもいるといえる。何故なら、語り手を炎（光）に擬しているからだ。

ここで、恋人が炎のイメージでとらえられていることについて考えたい。遡れば、相手に対してまだ憧れの域にある状態を詠んだ第4「愛のガザル」第7行において、“Only in my dreams [do] his feet touch the ground”（「僕の夢の中でだけ彼は地上に降りてくる」）と、語り手が恋人をどこか天上的な存在と崇めていたことを思い出そう。旧約・新約聖書において、創造的であると同時に破壊的な神の存在と活動とが、火、光、炎で表象される。（ルルカー 308-9）さらにイスラームにおいても、もし「アッラーがその本体を純粹無雜な形で示すことがあると仮定すれば〔中略〕それは目もくらむばかりの光と美の形象」であろうと井筒俊彦は書いている。（井筒 2013、141）。この「ガザル」において、恋人は炎のイメージで捉えられ、神にも似た存在とされているといえる。そして「炎」と「蛾」との“union in annihilation”（「消滅における合一」）が語られる。言葉の上では「炎」の方が「自らを差し出した」ことになっているが、勿論、現実は逆だったはずだ。この「合一」が性愛的成就即ちエクスタシーを指すことはいうまでもなく、二人の間にそれがあつたことは第7「悲しみのガザル」で見たとおりである。しかしこの「光のガザル」においては、恋人が神と重ね合わせられていることによって、神と人との合一のエクスタシーをも暗示していることになり、神秘主義めいている。

ここで神秘主義について少し触れておく必要がある。神秘主義とは、神秘を知ること、即ち「外界の対象を追いかける心の動きを抑えて、意識のエネルギーを一点に集約し、経験的次元で働く認識機能、つまり感覚・知覚・理性などとは全く異なる認識機能」によって、神の实在を直接的に体験することで、その意味で神について理性で思惟を巡らせる神学とは対立する――それゆえ正系からは異端視された――ものであることは、キリスト教の立場から書かれた書物にもイスラームの立場から書かれた書物にもあるとおりだ。⁵ 神秘主義の

実践には厳しい手順が定められており、自我の覚醒、自我の浄化、自我の照明などの段階を経て辿り着く観照の最終段階において、自我は消滅し、「神的われ」、「神のわれ」が自覚される。(井筒 1980、61) 人は神と合一でき、それがエクスタシーである。イスラーム神秘主義(スーフィズム)もキリスト教のそれも、それぞれの正系が神と人との断絶を前提しているのに対して、この世の存在の一切を神からの「流出」(emanation)であるとするプロティヌスの新プラトン主義の影響を受けている。だからこそエクスタシーにおいて神と人との合一が可能になる。「スーフィズムは愛の喜びだとか、恋の悩みだとかについて語り、神に対する人間の魂の思慕の情、恋慕の情の上に立つきわめて主体的体験的〔中略〕燃え上がる情念」と井筒は書いている。(井筒 1980、15) 同じことはキリスト教神秘主義についてもいえる。詩的想像力の中で恋人への思慕が神への思慕に重ねられる素地がここにある。こうした意味でのエクスタシーをこの「炎」と「蛾」との二行に窺うことができよう。先般、筆者が詩人に『ガザル』にあるスーフィズム的要素を指摘したところ、「あの頃読んでいたものの影響かもしれない」という答えだった。自註で詩人の挙げているルーミーは、先にも触れたとおり、13世紀ペルシャ神秘主義の最高詩人である。(黒柳 435) ペルシャ詩人の影響はあろうが、それはそもそも上述のような素地のある神秘主義に共振する感受性がアルフィアン自身にあったことだろう。

この第10「ガザル」の「炎」の二行において、語り手は自分の恋病と失恋との経験を「炎」と「蛾」との間の「消滅における合一」と分節し、理想の愛の形として提示しているが、それは現実の立場を強引に逆転させてのことだから、その愛は反事実、嘘、無かったものということになる。この世で人間の相手に期待してはいけないものを期待した錯誤として、恋の体験を言語上で整序したといえよう。アルフィアンは同性愛遍歴を赤裸に詠んだ告白的詩の中で、上と同じ趣旨のことを“The more we made love the more I understood that sex is always an unfulfilled fantasy, and love, the eternal fantasy of fulfillment”(Alfian 2012, 92-93) と、より直截的に表している。おそらく、現実は殆どい

つも夢想したエクスタシーに及ばない。最終聯に“Remember, Alfian, the children who collected sweet wrappers. / Watching the world through cellophane squares, unblinking”とあり、語り手は憧れの色つきメガネで世界を見ることをやめた、無垢を失い大人になった、ということがわかる。

言葉に封じ込めて恋は葬った。だが空しさが残る。第11「ガザル」は“Emptiness”（空しさ）についてである。その「空しさ」は“void”（空洞）となり、語り手に“that other world”（来世）を想像させる。大抵のイスラーム関係の書物にあるように、六信という、イスラーム教徒が信じなければならない六つの実在のひとつが「来世」（その他は唯一神、天使、啓典、使徒、定命）で、この世の生ではなく最後の審判の結果与えられる天国あるいは地獄での「来世」こそ重要とされる。井筒によれば、「来世」は、世界の終末の時に来るものだが、「存在的にはすでに始めからそこにあって不断に働いていると考え」（井筒 2015、175）られる。常に「来世」が「現世」の評価基準として在ると考えたらいいだろうか。井筒はまた次の様に説明する：

今、ある人がムスリムになったとすると、そのとたんに自分の現に生きている存在そのものが、「現世」と呼ばれる特殊な、限界づけられた存在様式としての意味体系の中に組み込まれて、「来世」という全く別の存在様式と対立し、それに基づいてこの世の事象の一切が何とは知れぬ象徴性を帯びて来る。（井筒 2015、128-9）

アルフィアンは厳格な信者ではないが、「文化的ムスリム」（本人の言葉）として、「別の存在様式」を意識していたことは、第3「死のガザル」の締めくくりの二行“Alfian, no heaven is imaginary, but they have to be imagined”からも明らかである。「空しさのガザル」の第3聯で、「空洞」は「墓穴」になる：“Six feet of soil will be too shallow a grave for you / The scent of your breath will elope with my memory”。恋人は恋の記憶と共に葬り去ったはずだ。だ

が、“elope”（駆け落ちする）という語が恋人の亡霊を（未来形ゆえいついつまでも）立ち上がらせる。第9「痛みのガザル」で「匂い」が訣別を決めた恋人の戸口に語り手を引き寄せたことを思い出そう。肉体を交わしたればこそ、「匂い」という曖昧でありながら強力な感覚を、身体が記憶しているのだ。しかし、第5聯でその恋の経験を捉え直している：“These open arms will direct you to the position of the heart. / The message of every embrace: our hearts are on different sides”。肉体は同じ側にあったが、両者の心の間には墓穴に似た深い断絶があったという総括だ。最終聯に“the fog lifts”（霧が晴れ），“the lifting of your eyelids”（瞼が開く）とあり、金色のメガネは捨てられ、恋の現実と空しさが確認されたことがわかる。

4

恋愛による人との繋がりやの空しさを知ったからといって、語り手は世界に背を向けるわけではない。最終の「共感のガザル」において、“Solitude is an illusion, I have never believed in it. / To choose to be alone is to choose abandonment” (3-4) と箴言的文言で自らに言いきかせ、“When the line is drawn from object to object / There is still the task of drawing a connection”と、他者／世界と繋がることの必要性を語る。そして最終聯には“Yes, Alfian, like they say, the key is compassion. / But only because it unlocks nothing—but compassion”とあり、他者の心を開き繋がりを実現させるべく共感に希望を託している。⁶既に述べたように、この「ガザル」に過去形は出てこない。

「鍵は共感」とはなんと陳腐な箴言に聞こえる。だが同義語の *sympathy* でも *empathy* でも *pity* でもなく“compassion”と分節されたことが、その「共感」の内容に厳しさを持たせている。この語はもともと「対等な者同士で苦しみを共にすることを意味し、対等と考える者同士が想像力ないし感情によって、他者の苦しみにいし不運を分かち合う」ことを指すようになった。(Webster's New Dictionary of Synonyms 1978) そしていうまでもなく *passion*

はイエスまたその他の受難者たちを想起させるから、他の三語と違って、この語は気持ちだけではなく受動的でありながら能動的である行為をも暗示する。実は、受難のイメージは第10「光のガザル」に既に一瞬現れていた。“Between the leaves rays pierce through like spears” (2)がそれで、イエスをはじめとする殉教者のイメージを喚起せずにはおかない。語り手が言う「共感」は自らが苦しむ―「想像力ないし感情によって」―ことを含み、それは極限的状况にあつては、受難者・殉教者のように自らの命を捨てることを求められることもありうる。それが、第5聯の“To give is selfless, meaning: having no self”の究極の意味で、「共感」というのはそこまで含めてのことである。悲しみの共感の欠如に語り手が恋人との相容れなさを感じていたことを思い起こそう。翻って、私たちが例えば「〇〇に寄り添って」とか「沖縄の人々の痛みを理解して」(たまたま早朝のラジオから聞こえてきた誰か評論家か何かの言葉)などと言う時、何ほどの緊張を込めてのことだろう。『ガザル』の語り手は、恋の経験をとおして、他者・世界と繋がることを可能にするのは共に苦しむこと、との洞察に至ったといえよう。

おわりに

谷川俊太郎は、詩は「言語にならないような意識下の中から、これから意味になるのかなあというものが自然に生まれてきて」形をなす、と言う。(谷川 24) T. S. エリオットは、詩は“unknown, dark psychic material”、比喩的にいえば“demon”(魔物)が、最終的に“arranged in the right way”の言葉になったもので、それを実現した時詩人は“annihilation”(消滅)に近い何かを、一瞬の「解放感」を経験する、と書く。(Eliot 98-100)ここに見られる詩の発生についての詩人たち自身による説明は、言葉を発することそのものについての説明と共通している。「それまで分節されていなかったマグマの如き生体験の連続体に区切りを入れて、これを観念なり事物なりのカテゴリーとして存在せしめること」と、丸山圭三郎は「世界のロゴス化」すなわち言語化を

定義する。(丸山 22)「言語にならないような意識下の中」にあるもの、“unknown, dark psychic material”あるいは“demon”、「マグマの如き生体験の連続体」は同じものを指すと考えてよいだろう。その形式上断片性を内包する「電撃のガザル」の核心にある詩人の「心的素材」、「魔物」が恋の経験であることが確認できた。地上的な性愛成就の悦び、それに対する身の程知らずの期待、当然の結果としての幻滅、その果てに残された共感に対する希望などが入り混じり意識下の中で蠢く「生体験の連続体」、言葉以前のものを、アルフィアンは語り手をとおして分節した。内部世界の渾沌を言葉の次元で整序したわけだ。それは手前勝手な言語操作（「印象操作」？）、読者欺瞞、自己欺瞞といえまいか。しかし、「言語そのものの中に自分ではない他者が初めから含まれて」（谷川 51）いて、既に外にあるものであるから、そもそもそれを使うことはズレを、もしかすると反事実を、欺瞞を免れない。

言葉が無定形に蠢く感情や思考を押し込める容器なら、ガザルという詩型も容器であり、アルフィアンは、彼が通常利用する自由詩型ではなくこの緩やかな定型を使って、自分の内部の得体の知れぬものを整序しようとしたのかもしれない。その自立的断片性は雑多な題材を扱う中に優れて個人的な恋の経験を――密やかにだが確実に――練り込むことを可能にするのであるから。「電撃のガザル」は、『記憶喪失の〔公共的〕歴史』の中に収められたアルフィアンの精神の軌跡を読み取ることのできる、「記憶喪失の個人史」といえる。その意味で、社会的目的に突き動かされた他の多くのアルフィアンの詩とは異なって、およそシンガポールのことなど意識の範囲外の読者にも訴える普遍的意義を持つものといえよう。

註

- 1 「公共的」主題の詩としてよく取り上げられるものには、“Singapore You Are Not My Country”、“The Merlion”、“Ode to the Army” などがある。
同世代の中国系シンガポール詩人 Cyril Wong の詩集への前書きとして寄

せた詩の中で、アルフィアンは、色々な意味で少数者集団であるマレー系詩人として、中国系詩人とは異なって、「民族」の「ペルソナ」を着けて「活動家」たらざるをえぬ不「自由」さ、やりにくさを吐露している。(Wong 11-15)

- 2 ガザル詩型については、*Oxford English Dictionary*、嶋田襄平「アラブ文学史」、*“Ghazal: Poetic Form”*などを参照。
- 3 アルフィアンの戯曲集への前書き“Queering Singapore”の中で Eng-Beng Lim は “gay saunas, bars, gyms and parties with both western and Asian influences are freely proliferating and sometimes raided by the police force” (Lim 17) と書いている。アルフィアン自身、詩、短編小説、戯曲の中でゲイたちの出逢いを扱っている。また、1993年11月23日に埋め立て地の疎林の中で反ゲイ闘作戦が実施され12人が逮捕されたが、その事件をもアルフィアンはある戯曲 (“Landmarks,” *The Collected Plays Two: The Asian Boys Trilogy*) の中で取り上げている。
- 4 炎に引きつけられる蛾のイメージについては以下のような例がある。『バガヴァッド・ギータ』においてヒンズー教のヴィシュヌ神がその光焰を発する巨大で恐ろしい真の姿をアルジュナ王子に露にする場面で、蛾（そして人間）が火の中に猛烈な速さで飛び込んで自滅する描写がある。(井筒 2013、17) ドメニコ・スカルラッティ (1685-1757) の歌曲 “Qual farfalletta amante” は女性への思慕を表して「私は恋する蝶 [蛾であることは明らか] のように／炎に向って飛んで行く」と詠う。(『イタリア歌曲集 2』64-68)。T. S. Eliot の “The Burnt Dancer” は「遠い星からここに引き寄せられ」て炎の周りを巡り、「致命的な破滅」へ向う殉教者めいた黒い蛾の舞踏を描いている。(Eliot 1996、62-63) また “To — ‘One word is too often profaned’” における Shelley の「蛾」は、(炎ではないが) 星に憧れ、やはり遠いものに対する思慕を表している。(Shelley, *Poetical Works* 645)

- 5 キリスト教神秘主義については、名著とされる Evelyn Underhill の *Mysticism*、Paul De Jaegher 編 *Anthology of Christian Mysticism*、および 菊地章太著『エクスタシーの神学』を参考にした。
- 6 “compassion” は、「思いやり」、「憐れみ」、「同情」といった情緒的な訳語を嫌って「共感」とした。最近、新聞記事中にこの語をよく見る：「人の痛みがわかる『共感性』」が大切という現ローマ法王の訴え（朝日新聞 2016年 7月17日 朝刊）、医学教育における患者に対する共感（力）訓練の必要性の指摘（毎日新聞 2016年 8月17日および 2017年 7月17日 朝刊）、性暴力を受けた場合本人にも落ち度があるという意見に対しての「想像力や共感力の欠如も一因」との臨床心理学者の批判（毎日新聞 2017年 7月 2日 朝刊）。「鍵は共感」とは、決して陳腐な箴言とはいえない。

引用・参考文献

- Alfian Sa'at. *A History of Amnesia*. Singapore: Ethos Books, 2001.
- 一. “Preface for Cyril Wong.” *end of his orbit*. By Cyril Wong. Singapore: firstfruits, 2001. Print.
 - 一. “Landmarks.” *The Collected Plays Two: The Asian Boys Trilogy*. Singapore: Ethos Books, 2010. 109-187. Print.
 - 一. *The Invisible Manuscript*. Singapore: Math Paper Press, 2012. Print.
- De Jaegher, ed. *An Anthology of Mysticism*. Trans. Donald Attwater and Others. Springfield: Templegate, 1977. Print.
- Eliot, T. S. “The Three Voices of Poetry.” *On Poetry and Poets*. 1957. London: Faber and Faber, 1969. 89-102. Print.
- 一. *Inventions of the March Hare: Poems 1909-1917 by T. S. Eliot*. Ed. Christopher Ricks. London: Faber and Faber, 1996. Print.
- “File: ST12MenNabbedInAntiGayOp.jpg.” *S'pore LGBT Encyclopedia*. 30 Oct.

2012. Web. 21 Apr. 2017.
- “Ghazal: Poetic Reference.” *NewPoetsPress*, n.d. Web. 11 Oct. 2016.
- “Ghazal: Poetic Form.” *Academy of American Poets*. 21 Feb. 2014. Web. 21 Apr. 2017.
- Lim, Eng-Beng. “Queering Singapore.” Introduction. *The Collected Plays One: The Optic Trilogy*. By Alfian Sa’at. Singapore: Ethos Books, 2010. 10-24. Print.
- Patke, Rajeev S. “Voice and Authority in English Poetry from Singapore.” *Interlogue: Studies in Singapore Literature Volume 2, Poetry*. Ed. Kirpal Singh. Singapore: Ethos Books, 1999. 85-103. Print.
- Shelley, Percy Bysshe. *Poetical Works*. 1905. Ed. Thomas Hutchinson. Oxford: Oxford UP, 1970. Print.
- Underhill, Evelyn. *Mysticism: The Nature and Development of Spiritual Consciousness*. 1911. Oxford: Oneworld Publication, 2000. Print.
- 井筒俊彦『イスラーム哲学の原像』1980年 岩波書店 2013年
- 一、『コーランを読む』1983年 岩波書店 2014年
- 一、『イスラーム生誕』1979年 人文書院 中央公論社 2015年
- 菊地章太『エクスタシーの神学：キリスト教神秘主義の扉を開く』筑摩書房 2014年
- 黒柳恒男「近世ペルシャ文学史」『アラビア・ペルシャ集』筑摩書房 1964年 419-442頁
- 嶋田襄平「アラブ文学史」『アラビア・ペルシャ集』筑摩書房 1964年 393-418頁
- スカラルッティ、ドメニコ “Qual farfalletta amante”『イタリア歌曲集 2』 1969年 畑中良輔編 全音楽譜出版社 1998年 64-68頁
- 谷川俊太郎・和合亮一『日本語の話』青土社 2010年
- ド・フリース、アト『イメージ・シンボル事典』山下修一郎他訳 大修館

1984年

丸山圭三郎『言葉と無意識』講談社 1987年

ルルカー、マンフレート『聖書象徴事典』池田絃一訳 1988年 人文書院

1990年

A Reading of Alfian Sa’at’s “The Electric Ghazals”

Miyuki Nagaoka

The essay proposes a reading of Alfian Sa’at’s “The Electric Ghazals,” a set of twelve poems in the ghazal form, each dealing with oblivion, equanimity, death, love, jealousy, happiness, sorrow, hope, pain, light, emptiness, and compassion, respectively. They are generally less well known than his often provocative poems of socio-political import, but are by no means to be slighted, for a fuller and deeper understanding of the poet and his poetry, as a piece revealing a trajectory of his youthful, longing imagination. Consisting of several structurally, thematically, and emotionally autonomous couplets, the ghazal form allows a poet to juxtapose disparate elements without explaining their connection. In Alfian’s ghazals, too, the speaker presents apparently unrelated observations, images, ideas, and insights he gets during the imagination’s progress in his searching for answers to life’s questions, and he does so often in maxim-like sentences using, naturally, the present tense. Indeed, the use of the past tense is rare. And what rare cases of the past tense we find occur almost always in conjunction with his experience of infatuation/love, at the end of which he seems to come to learn that one should not expect more from human beings than they can give. It is, as I wish to show, that experience that drives the speaker to reflect on situations life throws him (or us) into and that lies at the heart of his preverbal mire awaiting articulation.

「韓語覚書」の朝鮮語かな表記について — 子音について —

金 文 姫

1. 序

対馬歴史民俗資料館には従来朝鮮語史研究者の視野の外にあった新資料『信使并譯官聘問之次第（仮題）』の附「韓語覚書」が所蔵されるが、本論文は、その朝鮮語かな表記の子音部分について調査・考察をおこなったものである¹。

該書は、対馬歴史民俗資料館所蔵〔図書番号：宗家文庫、記録類、朝鮮関係 R-5〕² 1冊、写本全11丁から成る。1丁から5丁表までは、日本側の倭館館守等が朝鮮側の訓導等に宛てた漢文の書簡とその和訳の用例集、6丁表から9丁表までは、「信使并譯官聘問之次第」で、年代順に通信使・訳官使を列挙したものである³。9丁裏から11丁裏までが、本論文の調査対象の「韓語覚書」（以下〔韓〕と略記する）であるが、かなで表記された朝鮮語の単語および文が収められている。たとえば、

	終 ^{テヨ} 始 ^シ
和 鮮	
ヲ ナ	
ハ シ	
ル ユ	
マ グ	
テ ト	
ト ロ	
云 キ	
心 ラ	
也 ハ	
	ント
	チ
	ラ

のごとく、まず、漢字の見出し語を示し、その右横にカタカナで朝鮮語の発音を書き、さらに、その下に朝鮮語と日本語で単語の意味を説明してある。

2. 朝鮮語かな表記の子音について

一体かなで表記された朝鮮語の資料は、ハングルで表記された本国資料からは窺い知れない音声・音韻的情報を伝えることがあり、従来から『全一道人』⁴（以下〔全〕と略記する）、『朝鮮語訳』⁵（以下〔訳〕と略記する）などの朝鮮語かな表記資料が朝鮮語および日本語の音韻史資料として利用されてきた。ここに取り上げる〔韓〕もそれらの既存資料に匹敵する資料的価値を有するものと予想されるが、本章では、とくにその子音部分の転写システムについて、かな表記とハングル表記復元形とを対照しつつ検討する。なお、必要に応じて適宜、既存の朝鮮語かな表記資料とも比較する。そして、本書が、既存の朝鮮語かな表記資料とおおむねは類似した傾向を示す一方で、「ㄷ(d)」⁶口蓋音化を過剰訂正した特異な例も散見され、朝鮮語東南方言の特徴を顕著に示す独自性も有することなどを主張する。

2.1 破裂音

2.1.1 ㄱ(g)

(1)語頭初声

〔韓〕の語頭初声「ㄱ」は総34例。そのうち、30例に「カ行音」、3例に「ガ行音」が当てられている。残り1例はかな表記がない。

「ガ行音」のかなが当てられた3例は、語の区切れの後に現れてはいるものの、むしろ語中の例とみなすべきもので、すべてが依存形式であり、「ㄱ」に鼻音⁷が前接する場合である。

[表1] [韓] の語頭初声「ㄱ」に対するかな表記

「カ行音」	*36	コグドロイ	[<u>공</u> 도로이] ⁸	*54	カラチタン	[<u>마</u> 치단]
依存形式の場合						
「カ行音」	*61	サロムル サロカイ ハノン	コシラ	[사름을 사 <u>ㄹ</u> 게하 <u>ㄴ</u> <u>것</u> 이라]		
	*40	フロミヤ クルン	ゴスル	[옴으 <u>며</u> 그른 <u>것</u> 을]		
「ガ行音」	*53	アム マリラト ニルノン	ゴシラ	[아 <u>ㅁ</u> 말이라 <u>도</u> 니르 <u>는</u> <u>것</u> 이라]		
	69	サロムル ホ ⁹ ツサ*イノン	ゴシラ	[사름을 보 <u>ㅅ</u> 네 <u>는</u> <u>것</u> 이라]		

(2)語中初声

[韓] の語中初声「ㄱ」は、総22例。そのうち、21例に「カ行音」、1例に「ガ行音」が当てられている。「ガ行音」が当てられた例は、鼻音が前接した場合である。

[表2] [韓] の語中初声「ㄱ」に「カ行音」が当てられたもの

①終声「ㄱ(g)、ㄷ(t)」 + 「カ行音」(濃音化)						
*11	カク <u>ㄱ</u>	[각 <u>ㄱ</u>]	*66	ソ*イイツ <u>ㄱ</u> 이	[쇠잇 <u>게</u>]	
②終声「ㅎ(h)」 + 「カ行音」(激音化)						
*34	チヨツ <u>ㄱ</u> 이	[똥 <u>개</u>]				
③母音 + 「カ行音」						
*11	ソイ <u>ㅁ</u> 라	[제 <u>ㅁ</u> 이라]	*61	サロ <u>ㄱ</u> 이	[사 <u>ㄹ</u> 개]	
④終声「ㄹ(r)」 + 「カ行音」						
*19	サル <u>ㄹ</u> ㅈ타	[술 <u>ㄹ</u> 다]	*47	모르 <u>ㅁ</u>	[멀 <u>ㄹ</u> 고]	

[表3] [韓] の語中初声「ㄱ」に「ガ行音」が当てられたもの

鼻音 + 「ガ」	*1	サムギン	[생 <u>ㄱ</u> 인]	(参考)鼻音 + 「カ」	*52	ヲムキヨ	[엄 <u>ㄱ</u> 교]
					*52	サロムケイ	[사 <u>ㄹ</u> 게]

以上の例において、濁点をふった「ガ行音」が当てられたものが鼻音が前接する場合に限られている点が注目される。この傾向は、他の朝鮮語かな資料でも観察され、[全]・[訳]の語中初声「ㄱ」も、「カ行音」と「ガ行音」のかなが当てられているが、「ガ行音」で現れるのは、「ㄱ」に鼻音が前接した場合である。

[全: 66] ハンガチロ: 一様に [한가지로]

[訳: 1:23a] イリヨランゴ: 儀て御坐るか [일이온고]

この現象は、当時の日本語の「ガ行音」が有声性だけではなく鼻音性も有していたことを示すものと考えられる¹⁰。

ところで、[韓]には、本来形の「ㄱ」ではなく、もともと「ㄷ(d)」であったものが高舌母音の前で口蓋音化して「ㅈ(j)」に変化し、さらに過剰訂正によって「ㄱ」に転じた例が散見される。

[表4] [韓]の過剰訂正により生じた「ㄱ」の例

「カ行音」と「ガ行音」のかな		
*12/*14	ト <u>ギ</u> ラ / ト <u>キ</u> ラ	[<u>뜰</u> 이 <u>라</u> > <u>뜨</u> 지 <u>라</u> > <u>뜨</u> 기 <u>라</u>]
(参考)*2	ト <u>チ</u> ラ	[<u>뜰</u> 이 <u>라</u> > <u>뜨</u> 지 <u>라</u>] (過剰訂正がなされていない例)

この「ㄱ」過剰訂正は、「ㄱ」が口蓋音化して「ㅈ(j)」になる現象の存在を前提としており、朝鮮語東南方言に特徴的な現象である¹¹。[韓]が朝鮮語東南方言を反映した資料であることを物語るものと言えよう。

なお、この例において、鼻音が前接しないにも関わらず濁点を付した「ギ」が現れている点が特異である。あるいは、[韓]の成立当時において、「ガ行音」がすでに鼻音性を喪失しはじめていたことを示すものかもしれない。

(3)終声

[韓]の終声「ㄱ」は総17例。15例が「カ行音」で現れ、残り2例はかな表

記がない。

〔表 5〕〔韓〕の終声「ㄱ」に対するかな表記

「ク」	*9	タムヨ <u>ク</u>	[탐 <u>옥</u>]	*89	タグテ <u>ク</u>	[탕 <u>택</u>]
-----	----	--------------	---------------	-----	--------------	---------------

2.1.2 ㄷ(d)

(1)語頭初声

〔韓〕の語頭初声「ㄷ」は総13例。11例に「タ行音」、2例に「タ*行音」を当てる。「タ*行音」が当てられた例は、「ㄷ」が口蓋音化して「ㄸ」に変化したものである。

〔表 6〕〔韓〕の語頭初声「ㄷ」に対するかな表記

「タ行音」	*7	タ <u>グ</u> ソ*	[<u>당</u> 초]	*10	トヲツヘ*ン	[두 <u>편</u>]
	*34	チヨツカ <u>イ</u>	[<u>동</u> 개]	*60	ト/ツ/ンノ <u>ン</u>	[<u>들</u> 논]
「タ*行音」	*49	テ* <u>グ</u> ネ <u>グ</u>	[<u>덩</u> 녕]	*76	テ* <u>ン</u> ジャ <u>グ</u>	[<u>던</u> 장]

(2)語中初声

〔韓〕の語中初声「ㄷ」は、総38例が現れ、29例に「タ行音」、8例に「ダ行音」、1例に「タ*行音」を当てる。「ダ行音」が当てられるのは、おおむねは「ㄱ」の場合と同じく鼻音が前接する場合であるが、鼻音が前接しない場合においても「ダ行音」が当てられることがある。「タ*行音」が当てられた例は、「ㄷ」が口蓋音化して「ㄸ」に変化したものである。

[表 7] [韓] の語中初声「ㄷ」に対するかな表記

①終声「ㄱ(g)、ㄷ(t)、ㄹ(b)」+「タ、タ*行音」(濃音化)					
*30	マツ <u>タ</u> チャノン	[맛 <u>당</u> 참ㄴ]	*89	シク <u>タ</u> ン	[씩 <u>단</u>]
*75	ヲゾロ <u>ブ</u> タ	[어즈럽 <u>다</u>]	*51	コク <u>テ</u> *グ	[각 <u>뎡</u>]
②母音+「タ、ダ行音」					
母音+「タ行音」			母音+「ダ行音」		
*18	レ <u>タ</u> イロ	[레 <u>대</u> 로]	*74	セ <u>ダ</u> イロ	[세 <u>딕</u> 로]
③終声「ㄹ(r)」+「タ行音」					
*38	ドル <u>タ</u>	[널 <u>다</u>]	*82	イル <u>タ</u> ン	[일 <u>단</u>]
④鼻音+「ダ、タ行音」					
鼻音+「ダ行音」			鼻音+「タ行音」		
*17	ウグ <u>ダ</u> ギ	[응 <u>당</u>]	*2	ナシユグ <u>ト</u> ロキラ	[내 <u>종도</u> 록이라ㄴ]
*24	ムン <u>ド</u> ク	[문 <u>득</u>]	*15	テ*ン <u>タ</u> イロ	[전 <u>대</u> 로]
*71	ドグ <u>ダ</u> ム	[농 <u>담</u>]	*71	シヤグ <u>ト</u> ク	[상 <u>동</u>]
*88	タム <u>ダ</u> グ	[담 <u>당</u>]	*48	ハグ <u>タ</u> グ	[황 <u>당</u>]

鼻音が前接しない場合においても、ときに「ダ行音」が当てられることがあるのは、その他の朝鮮語かな表記資料にも共通して見られる現象である。[全]および[訳]でも、語中初声「ㄷ」に「ダ行音」が当てられるのは、おもに鼻音の後であるが、鼻音以外の有声音の後で現れることもある。

[全: 24] ソンゾドルハ: 孫たちを [손조들을]

[訳: 1:2b] ナイ マルダイロ: 私申分を [내 말대로]

このように「ㄷ」には「ㄱ」の場合にはない例外が現れるが、これは、日本語の濁音の歴史的変遷過程と関連があるものと見られる。安田 (1973)¹² は、『捷解新語』¹³ における「ガ行音」と「ダ行音」に対するハングル音注の違い（前者はほぼ必ず鼻音を前置させるのに対し、後者は鼻音を前置させるものとさせないものが混在している）に基づき、日本語濁音の鼻音的要素の消失は「ガ行

音」よりも「ダ行音」において先に起こったとの推論を提示している。朝鮮語かな表記資料に見られる「ㄱ」と「ㄷ」に対するかな表記の如上の違いは、『捷解新語』に見られる現象と軌を一にするものであり、当時の日本語濁音において、「ガ行音」が未だ鼻音性をほぼ保持していたのに対し、「ダ行音」は徐々に喪失していく過程にあったことを示すものと考えられる。

(3)終声

〔韓〕には、終声「ㄷ」の例は見当たらないが、「ㄴ(s)」が終声の位置において「ㄷ」に中和された例が見られ、すべて「ツ」が当てられている。

〔表 8〕 〔韓〕の終声「ㄷ」に対するかな表記

「ツ」	*4	モ <u>ツ</u> トロ	[<u>모</u> 도록]	*61	コ <u>ツ</u> ト	[<u>것</u> 도]
	*53	ウ <u>ツ</u>	[<u>웃</u>]			

2.1.3 ㄷ(b)

(1)語頭初声

〔韓〕の語頭初声「ㄷ」は、総20例が現れ、18例が「ハ*行音」、2例が「ハ行音」を当てる。

〔表 9〕 〔韓〕の語頭初声「ㄷ」に対するかな表記

「ハ行音」	*50	ホ <u>ク</u> ボキ	[<u>벽</u> 버기 / <u>벽</u> 벽이]
「ハ*行音」	*26	フ* <u>ル</u> ウイ	[<u>블</u> 의]

(2)語中初声

〔韓〕の語中初声「ㄷ」は、総7例。4例に「バ行音」、3例に「ハ*行音」を当てる。母音終わりと終声鼻音(ㄴ(n)、ㅇ(ŋ))の後で「バ行音」と「ハ*行音」で現れ、終声「ㄱ(g)」の後では「バ行音」(例*50)で現れている。

[表10] [韓] の語中初声「ㄷ」に対するかな表記

「バ行音」	*50	ホク <u>ボ</u> キ	[<u>ㅍ</u> ㅅㅂ기 / <u>ㅍ</u> ㅅㅂ이]	*57	フ* <u>ン</u> ベル	[<u>분</u> 별]
	*68	ビ <u>バ</u> グ	[<u>비</u> 방]			
「ハ*行音」	*29	マグ <u>ハ</u> *ル	[망 <u>발</u>]	*52	フ* <u>ン</u> フ*	[<u>분</u> 부]
	*67	ホイ <u>ハ</u> *グ	[<u>휘</u> 방]			
有声音＋「ハ*行音」(①)、非有声音＋「バ行音」(②)						
①*29	マグ <u>ハ</u> *ル	[망 <u>발</u>]	②*50	ホク <u>ボ</u> キ	[<u>ㅍ</u> ㅅㅂ기 / <u>ㅍ</u> ㅅㅂ이]	

以上の語頭・語中の初声「ㄷ」に対するかな表記を観察するに、おおむねは、無声音 [p] として発音される場合には「ハ*行音」を、有声音 [b] として発音される場合には「バ行音」を当てたものと見られる。

(3)終声

[韓] の終声「ㄷ」は、総 7 例。5 例が「プ」、「フ*」と「ム」が 1 例ずつ現れる。「ム」が現れるのは、終声の「ㄷ」の後続の初声に鼻音「ㄴ」がある場合である。

[表11] [韓] の終声「ㄷ」に対するかな表記

「プ」	*19	サルコ <u>プ</u> タ	[<u>솔</u> 갑다]	*62	ト <u>プ</u> タ	[<u>돋</u> 다]
	*19	スルコ <u>プ</u> タ	[<u>슬</u> 갑다]	*75	ヲゾロ <u>プ</u> タ	[어즈 <u>럽</u> 다]
「フ*」	*25	ク <u>フ</u> *?コ	[<u>급</u> 거]			
「ム」	*28	ヲ <u>ム</u> ノン	[<u>엷</u> 논]			

2.1.4 ㄱ(k)

[韓] の語頭初声と語中初声「ㄱ」は、総 2 例。すべて「カ行音」のかなが当てられる。

[表12] [韓] の語頭・語中初声「ㄷ」に対するかな表記

語頭	*36	ク <u>タ</u>	[크 <u>다</u>]	語中	*45	ヘ* <u>ン</u> カイハタ	[편 <u>캐</u> 다]
----	-----	------------	---------------	----	-----	------------------	----------------

2.1.5 ㅌ(t)

(1)語頭初声

[韓] の語頭初声「ㅌ」は、総4例。すべて「タ行音」が当てられる。

[表13] [韓] の語頭初声「ㅌ」に対するかな表記

「タ行音」	*9	タムヨク	[탐 <u>육</u>]	*89	タ <u>グ</u> テ*ク	[탕 <u>덕</u>]
-------	----	------	---------------	-----	----------------	---------------

(2)語中初声

[韓] の語中初声「ㅌ」は、総5例。4例が「タ行音」、1例が「タ*行音」で現れる。「タ*行音」が当てられた例は、「ㅌ」が口蓋音化して「ㄷ(c)」に変化したものである。

[表14] [韓] の語中初声「ㅌ」に対するかな表記

「タ行音」	*9	タム <u>タ</u>	[탐 <u>타</u>]	*77	ベント <u>グ</u>	[번 <u>통</u>]
	*32	モツトル <u>タ</u> ハン	[못 <u>홀타</u> 흔]			
「タ*行音」	*89	タ <u>グ</u> テ*ク	[탕 <u>덕</u>]			

2.1.6 ㅍ(p)

(1)語頭初声

[韓] の語頭初声「ㅍ」は、総4例。「ハ*行音」が2例、「ハ行音」と「バ行音」が1例ずつである。

[表15] [韓] の語頭初声「ㄹ」に対するかな表記

「ハ行音」	*32	ヘナンチ	[<u>편</u> 안치]	「ハ*行音」	*10	ヒ*ツサ*イ	[<u>피</u> 츠]
「バ行音」	*50	ビレン	[<u>필</u> 연]		*36	ヘ*ンカイハタ	[<u>편</u> 캐하다]

(2)語中初声

[韓] の語中初声「ㄹ」は、総10例。9例が「ハ*行音」、1例が「バ行音」のかなで現れる。また、激音を表すため「ハ*行音」の前に「ツ」をとともなうこともあるが、これは、[全]、[訳] でも同様にみられることである。

[表16] [韓] の語中初声「ㄹ」に対するかな表記

「バ行音」	*43	ナグ <u>バイ</u>	[<u>낭</u> 패]	「ハ*行音」	*1	セグフ*ミ	[성 <u>품</u>]
					*33	フ*ルヘ*グ	[블 <u>평</u>]
					*30	ヒ*ツヘ*ン	[비 <u>편</u>]

2.2 破擦音

2.2.1 ス(j)

(1)語頭初声

[韓] の語頭初声「스」は、総22例。「タ行音」が10例、「タ*行音」が5例、また、「サ*行音」が4例、「サ行音」と「ザ行音」が1例ずつである。残り1例は、かな表記がない。

「스」は、後続する母音によって、様々なかなで表記されている。「タ行音」のかなは「チ、テ*、ツ」、 「サ行音」のかなは「ソ、ゾ、ソ*」の様々な形で現れる。これを表にまとめると、以下のようである。

[表17] [韓] の語頭初声「ㄷ」に対するかな表記の分布

	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
「サ行」					ソ
「ザ行」					ゾ
「サ*行」					ソ*
「タ行」		チ	ツ		
「タ*行」				テ*	

[韓] の「ㄷ」の用例数が少ないが、「オ段」には「サ行・ザ行・サ*行音」のかなが現れ、「イ段、ウ段、エ段」には、「タ行・タ*行音」のかなが現れることが分かる。以下の表は「ㄷ」の具体的な用例である。

[表18] [韓] の語頭初声「ㄷ」に対するかな表記

「サ行音」	*11	<u>ソ</u> イコミラ	[제 <u>ㅅ</u> 곰이라]	「ザ行音」	*62	<u>ゾ</u> ソ	[조 <u>ㅅ</u>]
「サ*行音」	*24	<u>ソ*</u> ルエン	[출연]	*78	<u>ソ*</u> イイネ	[죄인의]	
	66	<u>ソ</u> イイツカイ	[죄잇게]	*78	<u>ソ*</u> イメグル	[죄명을]	
「タ行音」	*2	<u>チ</u> ヨグシ	[종시]	*34	<u>チュ</u> ツヘ*ン	[쥬편]	
	*63	<u>ツ</u> ノン	[주느]	*66	<u>ツ</u> ザク	[조작]	
「タ*行音」	*15	<u>テ*</u> ンタイロ	[전대로]	*39	<u>テ*</u> クタ	[적다]	
	28	<u>テ</u> グシン	[정신]				

(2)語中初声

語中初声の場合も同様に、「サ行音」のかな（シ、ジ、ゾ、ソ*）と「タ行音」のかな（チ、ツ、ヅ、ツ*、テ*）で現れる。

[表19] [韓] の語中初声「ㄷ」に対するかな表記

「サ行音」	*2	ナ <u>シ</u> ユグ	[내 <u>중</u>]			
「ザ行音」	*41	コク <u>ジ</u> ヤク	[공 <u>정</u>]	*75	ヲ <u>ゾ</u> ロブタ	[어 <u>즈</u> 럽다]
「サ*行音」	*23	サ*ク <u>ソ</u> *ヲル	[창 <u>졸</u>]	*63	フ* <u>ソ</u> * <u>ク</u>	[부 <u>조</u>]
「タ行音」	*13	ウイ <u>チ</u>	[의 <u>지</u>]	*61	ヲト <u>ツ</u> ン	[얻어 <u>준</u>]
	*73	コヲ <u>ツ</u> ク	[거 <u>죽</u>]	*78	タ <u>チ</u> ム	[다 <u>집</u>]
「ダ行音」	*8	チム <u>ヅ</u> 、ラ	[집 <u>죽</u> 이라]			
「タ*行音」	*45	シヤグ <u>ツ</u> *ア	[상 <u>좌</u>]	*81	ム <u>テ</u> *グ	[무 <u>정</u>]

2.2.2 ㄷ(c)

(1)語頭初声

[韓] の語頭初声「ㄷ」は、総4例。1例が「サ*」、1例が「ソ*」で現れる。残り2例にはかな表記がない。

[表20] [韓] の語頭初声「ㄷ」に対するかな表記

「サ*行音」	*7	<u>ソ</u> *イミラ	[처 <u>음</u> 이라]	*23	<u>サ</u> *ク <u>ソ</u> *ヲル	[창 <u>졸</u>]
--------	----	---------------	-----------------	-----	--------------------------	---------------

(2)語中初声

[韓] の語中初声「ㄷ」は、総10例で「タ行音」と「サ行音」で現れる。

「ㄷ」は、「ト(a)」の前で「チヤ」、「ㄹ(o)」の前で「ソ*」、「ㄷ(i)」の前で「チ」、「ㅇ(e)」の前で「サ*、チヤ」、「ㅇ(yo)」の前で「チヨ」、「ㅅ(ai)」の前で「サ*イ」で現れる。

[表21] [韓] の語中初声「ㄷ」に対するかな表記

「タ行音」のかな							
ㄷ + 「ㅏ (a)」	*30	マツ <u>ヂ</u> ヤノ	[<u>맛</u> 당 <u>찰</u> 노]				
ㄷ + 「ㅣ (i)」	*32	ヘナ <u>ン</u> チ	[<u>편</u> 안 <u>치</u>]	*40	カイ <u>ツ</u> チヤ	[씨 <u>치</u> 아]	
	*56	カラ <u>チ</u> タ	[마 <u>리</u> 치다]	*60	ナンナ <u>チ</u>	[낫 <u>나</u> 치]	
ㄷ + 「ㅓ (e)」	*87	モツ <u>チ</u> ヤラ	[모 <u>츠</u> 라]	ㄷ + 「ㅕ (yo)」	*63	フ* <u>チ</u> ヨク	[부 <u>츙</u>]
「サ行音」のかな							
ㄷ + 「ㅗ (o)」	*7	タ <u>グ</u> ソ*	[당 <u>초</u>]	ㄷ + 「ㅑ (ai)」	*65	ホ* <u>ツ</u> サ* <u>イ</u> タ	[보 <u>채</u> 다]
ㄷ + 「ㅓ (e)」	*10	ヒ* <u>ツ</u> サ* <u>イ</u>	[피 <u>츠</u>]				

2.3 摩擦音

2.3.1 ㄸ(s)

(1)語頭初声

[韓] の語頭初声「ㄸ」は、総29例が現れ、28例が「サ行音」のかなで現れる。残り1例はかな表記がない。

[表22] [韓] の語頭初声「ㄸ」に対するかな表記

「サ行音」	*1	サム <u>ギ</u> ン	[<u>생</u> 긴]	*39	セ <u>シ</u> ユ	[<u>세</u> 슈]
-------	----	---------------	---------------	-----	--------------	---------------

(2)語中初声

[韓] の語中初声「ㄸ」は、総27例が現れ、25例がすべて「サ行音」のかなで現れる。残り2例はかな表記がない。

[表23] [韓] の語中初声「ㄸ」に対するかな表記

「サ行音」	*1	テン <u>セ</u> グ	[<u>텐</u> 성]	*38	ハル <u>シ</u> ユ	[<u>활</u> 슈]
-------	----	---------------	---------------	-----	---------------	---------------

(3)終声

「ハ」は、終声の位置においては「ㄷ」に中和され、「ツ」が当てられる。これについては、すでに「ㄷ」の項目で述べたとおりである。

2.3.2 ㅎ(h)

(1)語頭初声

〔韓〕の語頭初声「ㅎ」は、総13例が現れ、すべて「ハ行音」で現れる。

〔表25〕 〔韓〕の語頭初声「ㅎ」に対するかな表記

「ハ行音」	*18	ハノ <u>ン</u>	[<u>ㅎ</u> 노]	*56	フ <u>ン</u> シユ	[<u>훈</u> 슈]
	*76	ヘエム <u>ル</u>	[<u>헐</u> 을]	*67	ホイハ* <u>グ</u>	[<u>훼</u> 방]

(2)語中初声

〔韓〕の語中初声「ㅎ」は、総10例が現れ、9例が「ハ行音」残り1例はかな表記がない。

〔表26〕 〔韓〕の語中初声「ㅎ」に対するかな表記

「ハ行音」	*6	イ <u>フ</u>	[이 <u>후</u>]	*66	モ <u>ハ</u> ム	[모 <u>함</u>]
-------	----	------------	---------------	-----	--------------	---------------

(3)終声

「ㅎ」は、終声の位置においては「ㄷ」に中和され、「ツ」が当てられる。〔韓〕には、1例のみ現れている。

〔表27〕 〔韓〕の終声「ㅎ」に対するかな表記

「ツ」	*34	チョ <u>ツ</u> カイ	[<u>돌</u> 개]
-----	-----	----------------	---------------

2.4 鼻音

2.4.1 ㄴ(n)

(1)語頭初声

〔韓〕の語頭初声「ㄴ」は、総15例。11例が「ナ行音」で現れ、3例が「ダ行音」、1例が「ジ」で現れる。「ダ行音」および「ジ」が当てられたものは、朝鮮語の鼻音「ㄴ」が異音として出わたり offglide の破裂音 [ʰd] をともなう場合があることと関連しているものと見られる¹⁴。

〔表28〕 〔韓〕の語頭初声「ㄴ」に対するかな表記

「ナ行音」	*2	ナシユグ	[내중]	*53	ニルノン	[니르논]
「ダ行音」	*47	ドルニカ	[널으니까]	*38	ドルタ	[널다]
「ジ」	*60	ジルノン	[니르논]			

他の朝鮮語かな表記資料も同じ傾向を示し、おおむね「ナ行音」で現れ、まれに「ダ行音」等で現れる。

〔全：41〕 ナムン：残った [나문(餘)]

〔全：34〕 ドイ{네}：あなた [네]

〔訳：1:2b〕 ナノン：私は [나논]

〔訳：1:56a〕 デルコブ：七 [닐곱]

(2)語中初声

〔韓〕の語中初声「ㄴ」は、総24例が現れ、すべて「ナ行音」のかなで現れる。

〔表29〕 〔韓〕の語中初声「ㄴ」に対するかな表記

「ナ行音」	*1	セグフ*ミニラ	[성품이 <u>니</u> 라]	*49	テ*グ <u>ネ</u> グ	[덩 <u>녕</u>]
-------	----	---------	------------------	-----	----------------	---------------

(3)終声

〔韓〕の終声「ㄴ」は、総64例。61例が「ン」で現れ、「ル」、「ム」が1例ずつ現れる。残り1例はかな表記がない。「ル」で現れたものは「ㄴ」が流音化したもの、「ム」で現れたものは、「ㄴ」が後続の「ㅁ」と結合して「ㄹ(m)」に転じたものである。

〔表30〕 〔韓〕の終声「ㄴ」に対するかな表記

「ン」	*19	エク <u>ミン</u>	[영 <u>민</u>]	*44	フ* <u>ン</u> メグ	[분 <u>명</u>]
「ル」	*16	テ* <u>ル</u> レ	[전 <u>레</u>]			
「ム」	*84	ハ <u>ム</u> タイ	[하 <u>뻬</u>]			

2.4.2 ロ(m)

(1)語頭初声

〔韓〕の語頭初声「ㄹ」は、総23例。22例が「マ行音」で現れ、1例が「ビ」で現れる。「ビ」で現れるのは、語頭初声「ㄴ」が「ダ行音」で転写されたのと同様に、朝鮮語の鼻音「ㄹ」が異音として出わたり offglide の破裂音 [ᄎb] をともなう場合があることと関連しているものと見られる。

〔表31〕 〔韓〕の語頭初声「ㄹ」に対するかな表記

「マ行音」	*5	<u>モ</u> ム	[<u>몰</u>]	*47	<u>モ</u> ルコ	[<u>멀</u> 코]
「バ行音」	*79	<u>ビ</u> トン	[<u>빈</u> 은]			

他の朝鮮語かな表記資料も同じ傾向を示し、おおむね「マ行音」で現れ、まれに「バ行音」で現れる。

[全: 48] マンナ: 会って [만나(會)]

[全: 78] ビリ: 予め [미리(預)]

[訳: 1:2a] マル: 物語 [말]

[訳 : 1:5a] 無恙{ブヤグ} : 無恙 [無恙{무恙}]

(2)語中初声

〔韓〕の語中初声「ロ」は、総22例。すべて「マ行音」のかなで現れる。

[表32] 〔韓〕の語中初声「ロ」に対するかな表記

「マ行音」	*19	エク <u>ミ</u> ン	[영 <u>민</u>]	*53	ア <u>ム</u>	[아 <u>므</u>]
-------	-----	---------------	---------------	-----	------------	---------------

(3)終声

〔韓〕の終声「ロ」は、総14例。13例が「マ行音」で現れる。残り1例はかな表記がない。

[表33] 〔韓〕の終声「ロ」に対するかな表記

「マ行音」	*9	タ <u>ム</u> タ	[탐 <u>타</u>]	*71	ドグダ <u>ム</u>	[농 <u>담</u>]
-------	----	--------------	---------------	-----	--------------	---------------

2.4.3 ○(ŋ)

「○」は、語頭初声の位置では子音として音価をもたないため、終声についてのみ述べることにする。

〔韓〕の終声「○」は総59例。「グ」が44例、「ク」が12例、「ム」が1例現れる。残り2例にはかな表記がない。「ム」は本来終声「ロ」に当てられるべきものであるので、終声「○」に「ム」が当てられた1例は、音節末音の [n] [m] [ŋ] の聴取が苦手な日本語母語話者特有の誤謬と見られる。

かな表記がない2例のうちの1例の*12「エエク (영영)」は、音節末音「○」を有する音節が連続するときに、後続の音節の初声にわたり音 [j] がある場合、前の音節の音節末音「○」が脱落することがあるが、かかる現象を反映したものと見られる¹⁵。

[表34] [韓] の終声「ㅇ」に対するかな表記

「グ」	*1	テンセ <u>グ</u>	[<u>텨</u> 성]	*52	チヨ <u>グ</u>	[<u>뎡</u>]
「ク」	*41	コ <u>ク</u> ジヤ <u>ク</u>	[<u>공</u> 정]	*20	エ <u>ク</u> マ	[<u>엥</u> 매]
「ム」	*1	サ <u>ム</u> ギン	[<u>생</u> 긴]			
「かな無」	*30	マツ <u>タ</u> チャノ <u>ン</u>	[<u>맛</u> 당참 <u>느</u>]	*12	エ <u>エ</u> ク	[<u>엥</u> 엥]

[全]・[訳] の終声「ㅇ」も、おおむね「グ」で現れ、「ク」も現れる。

[全: 17] ソラグホコ: 愛して [스랑ㅎ고]

[全: 115] メクハヤ: 言付けて [명히여]

[訳: 1:54b] クキヨグ: 月見 [구경]

[訳: 1:2a] 当{タク}ハヤ: 伴て [当{당}히여]

2.5 流音 ㄹ(r)

(1)語頭初声

[韓] の語頭初声「ㄹ」は、総3例。2例が「ラ行音」、1例が「ナ行音」で現れる。「ナ行音」が当てられたものは、頭音法則により「ㄹ」が「ㄴ」に変化したものである。

[表35] [韓] の語頭初声「ㄹ」に対するかな表記

「ラ行音」	*16	レソ	[<u>레</u> 스]	*18	レタイロ	[<u>레</u> 대로]
「ナ行音」	*30	ネグニ	[<u>녕</u> 리]			

(2)語中初声

[韓] の語中初声「ㄹ」は、総51例。46例は「ラ行音」、4例が「ナ行音」で現れる。残り1例はかな表記がない。「ナ行音」のかなが当てられたものは、前接する鼻音に同化して「ㄹ」が「ㄴ」に変化したものである。

[表36] [韓] の語中初声「ㄷ」に対するかな表記

「ラ行音」	*16	テ* <u>ル</u> レ	[<u>전</u> 레]	*52	ア <u>ラ</u> イ	[아 <u>래</u>]
「ナ行音」	*30	ネグ <u>ニ</u>	[<u>령</u> 리]	*75	シム <u>ナ</u> ン	[심 <u>란</u>]

(3)終声

[韓] の終声「ㄷ」は、総37例が現れ、36例が「ル」で現れる。残り1例はかな表記がない。

[表37] [韓] の終声「ㄷ」に対するかな表記

「ラ行音」	*19	ス <u>ル</u> コブタ	[<u>슬</u> 겁다]	*66	サラム <u>ル</u>	[사 <u>름</u> 을]
-------	-----	----------------	----------------	-----	--------------	----------------

[全]・[訳] の終声「ㄷ」は、「ル」と「ロ」で現れる。

[全: 74] コルコ: 挙げて [걸고]

[訳: 1:2a] 日本{イルボン}ノン: 日本は [日本{일본}은]

[訳: 1:27b] ハンカチロ コシニ: 同然で御さる [흔가지일것이니]

2.6 その他

2.6.1 Δ(z)

[韓] の「Δ」は、総2例。いずれも語中初声の例であるが、そのうち1例が「ザ行音」で現れている点が注目される。

[表38] [韓] の「Δ」に対するかな表記

*88	ソ <u>ン</u> ゾ	[<u>손</u> 조]	*75	モ <u>ヲ</u> ミ	[<u>므</u> 술이]
-----	--------------	---------------	-----	--------------	----------------

中期朝鮮語に存在した子音「Δ」は、音素としては16世紀前半に消失したとされており、表記上では16世紀末までかろうじて維持されていたが、17世紀に入って完全に廃用されたものである¹⁶。17世紀末以降の資料である [韓] にお

いて、なおもまだ「△」の音価を示すと見られる「ザ行音」のかな表記が現れることから、後代においても、一部の語において「△」がその音価を維持する場合もあったのではないかと考えられる。

2.6.2 語頭複子音（ロ－系、ハ－系）

中期朝鮮語においては語頭複子音（ロ－系、ハ－系）が許容され、近世朝鮮語においても一部その残存形が保たれていたと信じられている¹⁷が、本資料においてはその痕跡を確認することができない。すなわち、すべて単子音で現れている。

[表40] [韓] のロ－系に対するかな表記

「 <u>ㄹ</u> 」	*75/ *3	<u>ト</u> チラ / <u>ト</u> キラ	「 <u>ㄹ</u> 이라」	*77	<u>ト</u> ハル	「 <u>ㄹ</u> 을」
「 <u>ㄴ</u> 」	*38	ソ <u>ン</u> シ	「 <u>ㄴ</u> 씨」			
「 <u>ㄷ</u> 」	*84	<u>タ</u> イ	「 <u>ㄷ</u> 」			

[表41] [韓] のハ－系に対するかな表記

「 <u>ㅅ</u> 」	*40	<u>カ</u> イツチャ	「 <u>ㅅ</u> 치아」	ㅅ	*78	<u>ス</u> アシヤ	「 <u>ㅅ</u> 어서(씨서)」
--------------	-----	---------------	----------------	---	-----	--------------	--------------------

上の例において、語頭複子音の1つめの子音「ロ－」「ハ－」に対応するかな表記を確認することはできず、すべて単子音化した後代の形を反映したものである。

3. 結論

本論文では、[韓] の朝鮮語かな表記の子音部分について、ほぼ同時期の朝鮮語かな表記資料である[全]・[訳]と比較しながら考察を試みた。[韓] の朝鮮語かな表記は、他の朝鮮語かな表記資料とおおむねは類似した傾向を示す一方で、「ㄷ(d)」口蓋音化を過剰訂正した特異な例が現れるなど、朝鮮語東

南方言の特徴を示す独自の特徴も存在することが明らかとなった。

本論文の考察により明らかになった〔韓〕の特徴の要点をまとめれば、以下のとおりである。

- ①「ガ、ダ行音」の鼻音性の喪失：〔韓〕の例*74の「セダイロ」(세디로)のように、鼻音が前接しない場合においても、ときに「ダ行音」が当てられることがあるのは、その他の朝鮮語かな表記資料にも共通して見られる現象であり、この時期、「ダ行音」が徐々に鼻音性を失っていく過程にあったことを示すものである。一方、「ガ行音」については、例*12の「トギラ」(또이라)のような例外も見られるものの、濁音が付されるのはほぼ鼻音が前接する場合に限られている。当時の日本語濁音において、「ガ行音」が未だ鼻音性をほぼ保持していたのに対し、「ダ行音」は徐々に喪失していく過程にあったことを示すものと考えられる。
- ②口蓋音化の過剰訂正：〔韓〕において、「또이라」という語は、多くは「ㄷ」口蓋音化が起こった形態の「또지라」(トチラ)という形であるが、ときに「ㄱ(g)」へと過剰訂正した「トギラ」「トキラ」という形も現れている。これは、朝鮮語東南地方に顕著な音韻現象であり、本書の朝鮮語が東南方言を反映したものであることを示している。
- ③△(z)：16世紀前半に音素としての命脈を絶ったとされる「△」に対し「ザ行音」が当てられた例が現れる。〔韓〕は17世紀後半の資料であるので、「△」の消失時期は通説よりも遅い時期ではなかったかと疑われる。
- ④語頭初声「ㄴ(n)」および「ㄹ(m)」に対し、ときに「ダ行音」「バ行音」が当てられることがあり、その傾向はその他の朝鮮語かな表記資料にも一致しているが、これは「ㄴ」「ㄹ」の異音の出わたりをあらわしたものと見られる。

以上の本論文の考察により、〔韓〕も既存の朝鮮語かな表記資料に匹敵する朝鮮語音韻史資料として位置づけられることが明らかになったと信ずる。

注

- 1 その母音部分についての検討・考察は、金文姫（2017）において実施した。
- 2 『宗家文庫史料目録（記録類Ⅱ）』（宗家文庫調査委員会編、巖原町教育委員会発行、1985年）p.460。
- 3 その記載されている年代は元禄9年（1696年）までである。この事実から推して、本書『信使并譯官聘問之次第（仮題）』全体の成立年は、元禄9年以降であることが明らかであるが、おそらく元禄9年をさほど下らない時期であろうと推測される。
- 4 享保14年（1729）雨森芳洲著。1冊。写本。中国明代の汪廷訥の著した教訓書「(全一道人) 勸懲故事」を朝鮮語に訳し、これに日本語訳文を配したもの。朝鮮語本文の部分は全文かなによって表記されている。本書については、安田章（1964）に本文影印と詳細な解題があり、宋敏（1986）など朝鮮語史の立場からも大いに研究がなされてきた。かな書き朝鮮語資料の代表格的資料である。
- 5 早稲田大学服部文庫所蔵〔図書番号：イ17-2082-1～3（特）〕。3冊。写本。江戸中期の儒学者の服部南郭が寛延3年（1750）に筆写したもので、その底本は、寛延元（1748）の朝鮮通信使に随行した対馬人によって江戸にもたらされたものであったと推測される。岸田文隆（2010）等を参照。
- 6 ハングルのローマ字転写は、河野六郎（1955:367）による。以下同様。
- 7 初声「ㄱ」に前接する可能性のある音節末子音の鼻音には「ㄴ(n)」、「ㄹ(m)」、「ㅇ(ŋ)」の3種がある。
- 8 かな表記から推定されるハングル表記の復元形を〔 〕内に示す。以下同様。
- 9 「*」は三点の濁点を表す。
- 10 土井忠生訳（1955）p.637の「D, Dz, G の前の母音に関する第三則」を参照。なお、[韓]において、鼻音が前接する環境においても濁点を付さない「カ行音」も現れているが、それは濁点の付加が必ずしも義務的ではない

かったことを示している。

- 11 김주필 (2015:108) を参照。
- 12 pp.299-302。
- 13 朝鮮司訳院の倭学書（日本語学習書）。10巻。康熙15年（1676）刊。著者は康遇聖。康遇聖は文禄の役に捕虜になって日本に送られ、10年間日本で暮らし、その後、朝鮮に戻り訳官として活躍した。
- 14 安田章（1964）p.25、宋敏（1986）p.39。
- 15 [全]にも同様の現象が観察され、安田章（1964:9）には、「松陽(송양) : ショヤグ」、「従容(종용히) : チョヨギ」の例が現れている。
- 16 李基文（1998）p.203。
- 17 최현배 (1961:551-560)、허용 (1995:348-355)、岸田文隆（2009:11-26）を参照。

参考文献

- 金文姫（2017）「『韓語覚書』の朝鮮語かな表記について―母音について―」、『日本語文學』第73輯、pp.3-29、韓国日本語学会
- 김주필（2015）『구개음화의 통시성과 역동성』、과주 : 태학사
- 金周弼（2016）岸田文隆訳「近代韓国語의 ‘t > ʦ’ 變化를 통해 본 音韻變化의 機制―規則性 假設과 語彙擴散假設의 問題点과 代案을 中心으로―」、『朝鮮學報』、第239輯、朝鮮学会
- 宋敏（1986）『前期近代国語 音韻論 研究』、서울 : 塔出版社
- 李基文（1998）『新訂版 国語史概説』、과주 : 태학사
- 최현배（1961）『고친 한글갈』、서울 : 정음사
- 허용（1995）『국어 음운학』、서울 : 샘문화사
- 岸田文隆（2008）「早稲田大学服部文庫所蔵『朝鮮語訳』の朝鮮語かな表記について（その1：子音について）」、*Dynamics in Eurasian Languages*、pp.71-102、神戸 : 神戸市看護大学

- 岸田文隆 (2009) 「早稲田大学服部文庫所蔵『朝鮮語訳』について－文献学的考証と言語資料的価値－」、京都大学言語学懇話会第81回例会、2009年12月、会議報告 / 口頭発表
- 河野六郎 (1955) 『研究社世界言語概説』、市河三喜・服部四朗編、pp.357-439、東京：研究社出版株式会社
- 土井忠生 訳 (1955) J. ロドリゲス 『日本大文典』、東京：三省堂
- 安田章 (1964) 『全一道人の研究』、京都：京都大学国文学
- 安田章 (1973) 『三本対照捷解新語 釈文・索引・解題篇』、京都：京都大学国文学会

Marking Consonants: “A Vocabulary List of the Korean Language (韓語覚書)” and the Japanese notations of the Korean language in the late seventeenth-century Tsushima Island

Kim Moon-Hee

“A Vocabulary List of the Korean Language”, made in Tsushima, Japan in around 1696, is a list of Korean vocabulary including the Japanese orthography of the Korean words on the list. It exists as a two-and-a-half- page appendix to the tentatively titled “Codes for Receiving Joseon Envoys and Interpreters on the Tsushima Island (使并譯官聘問之次第)” at the Historical and Folk Archives of Tsushima (対馬歴史民俗資料館). On the vocabulary list, Japanese and Korean annotations for each Korean word follow under the sample Korean words and sentences. Also, in the descriptions and annotations in Korean, sometimes Katakana is used.

The notable characteristics of the consonants in “A Vocabulary List of the Korean Language” are the hypercorrection of the “d” palatalization, the “d-sound” and the “g-sound” which had no nasal sounds, and the “△ (z)-sound” which is generally believed to have been lost from the 15th to the late 16th century and is seen in the “A Vocabulary List of Korean Language”, the material of the late 17th century.

By specifically examining the consonants in the Japanese orthography of the Korean language in “A Vocabulary List of Korean Language”, this paper can shed new light on the historical phonetic and phonological studies of the Korean language.

suddenly 考 (2)

黒 宮 公 彦

1

黒宮（2016）に引き続き、**suddenly** には「状態変化が突然であること」を表す場合と「認識の変化が突然であること」を表す場合の2つの用法があるという仮説を検証していく。そのために **be** と **suddenly** が共起している文における **suddenly** の振る舞いについて、British National Corpus（以下 BNC と略記する）を使ってランダムに抽出した578例¹ を対象に調査する。

2

黒宮（2016）の繰り返しになるが、578例中 **suddenly** が実際に **be** を修飾していたのは239例のみだった。このうち **suddenly** が < **be** + 形容詞 > を修飾している73例については黒宮（2016）ですでに詳しく見た。本稿では **suddenly** が進行形を修飾しているものについて考察を加えることにしたい。

suddenly が **be** を修飾している239例中、進行形、すなわち < **be -ing** > を修飾していたのは29例だった。さらにこれ以外に進行受動形の例も2例ではあるが見られ²、これらも含めると計31例となる。予想外に多いというのが筆者の率直な感想である。

黒宮（2016）で触れたとおり、動詞の完結相と非完結相³ とが形態上区別される言語においては、一部の動詞、とりわけ状態動詞の完結相が起動相を示すことがあり、英語もこうした言語に該当すると Comrie（1976:19-20）は述べている。進行形は基本的に非完結相を示すのであるから状態動詞と似た性質を

有している。それが突然の状態変化を含意する **suddenly** とともに用いられると、状態動詞の完結形と同様、起動相、すなわちある状態から他の状態への移行（の開始）を示すと考えられる。つまり状態変化が生じているわけであるが、＜ **be suddenly** + 形容詞 ＞の場合と同様、＜ **be suddenly -ing** ＞の例についても「物理的な状態変化が突然であること」を表す場合と「認識の変化が突然であること」を表す場合とがあるように見受けられ、しかもどちらなのか判断のつきにくいものが多い。

- (1) a. He was glaring at me suddenly. (BNC: CEX)
 b. And suddenly, too, her brain was whirring. (BNC: H97)
 c. How could she not like it? ‘It’s a terrific idea!’ Suddenly Lisa was grinning from ear to ear. And suddenly, too, her brain was whirring. ‘I’ll do some additional designs for the special collection. We’ll need a few more to fill it out.’ (ibid.)
 d. [S]uddenly he was shouting in her ear. (BNC: F9X)
 e. At first he sounded distant, as if he was calling to her from the basement of a big house, but he came nearer very quickly and suddenly he was shouting in her ear. (ibid.)

(1a) では「彼が私をにらむ」という変化が突然起こったのだろう。しかも“**He suddenly glared at me.**” ではないのだから「彼が私をにらむ」状態がしばらく続いたことをも示唆している。要するに「彼は急に私をにらみだした」という日本語に相当するのだろう。しかし「彼が私をにらんでいることに突然気づいた」という可能性も否定できない。

(1b) の文意は明確でないので前後の文脈を確認したところ (1c) のようなものだった⁴。(1c) を見ても **whir** の意味ははっきりしないが、比喩表現であることは間違いなく、おそらくは「モーター音のような低く唸る音を立てる」

といったところだろうから、「頭脳が急にモーター音を立て始めた」、つまり「突然頭脳が回転し始めた」という意味だろう。要するにこの *whir* は「実際に、物理的に音を出す」ことを表すのではなく比喩なのであるから、そのような変化が突然生じるものなのかどうか判断するのは難しい。それまで働いていなかった頭脳が急に回り出したように感じることはあり得るようにも思うが、そのような場合というのは得てして、頭脳が動き出して少しした後ようやく「あ、今頭が働いている」と認識するに至る、ということが多いようにも思う⁵。

この、「物理的变化」と「認識の変化」のいずれが突然生じたのかという問題を考えるために (1d, e) を見てみよう。(1d) だけを見ると「彼が彼女の耳元で叫ぶ」という変化が突然起こり、しかもその状態がしばらく続いた、ということを表しているように思われる。誰かが耳元で叫んだらその瞬間に気づくだろうから「彼女は自分の耳元で彼が叫んでいることに（最初は気づかなかったが）突然気づいた」というのは不自然だ。ところが (1d) は実は (1e) の一部であり、(1e) 全体を読んで (1d) の先行文脈を確認すると「彼女は自分の耳元で彼が叫んでいることに突然気づいた」という解釈で正しいことが分かる。彼女には彼の声が初めから聞こえていた。ただ最初は声は遠くから聞こえた。ところが声は急に近付いてきて、いつの間にか彼女のすぐそばから大声が聞こえるようになっていた、ということなのである。

ここから重要なことが分かる。*suddenly* は「突然、急に」という意味もさることながら「いつの間にか」というニュアンスも含んでいるということだ。とりわけ < *was* [*were*] -ing > と共起した場合には、主語が意図的に行える動作については「思わず～していた」、そうでないものについては「いつの間にか（ふと気づくと）～していた」という日本語がぴったりくるものが多い。こうした文について、「物理的变化」と「認識の変化」のいずれが突然生じたのかという問いにはあまり意味がない。物理的变化が生じた直後にそれを認識したのであれば物理的变化が突然生じたという解釈になろうし、物理的变化が起きてしばらく後にそれを認識したのであれば認識の変化が突然生じたというこ

とになろう。しかし実際にはこの違いが意識されていると思えないような文が多い。より正確には、物理的変化がいつ生じたのが意識されておらず、それよりもその変化に主語（または話し手）が今気づいたことに焦点が当てられている文が多い。これはつまり、認識の変化が突然生じたことを表している文だということになる。

これと関連して興味深い事実がある。**suddenly** が < **be -ing** > を修飾している29例中、他動詞が用いられていた（すなわち **suddenly** が < **be V_i-ing** > を修飾していた）のはわずかに2例で、残りの27例では自動詞（すなわち < **be V_i-ing** > を修飾していた）が用いられていたのである。他動詞は基本的に意図的に行う動作を表すのだから、**suddenly** が < **be V-ing** > を修飾している場合、動詞 **V** が意図的に行う動作であることは多くないと予想される。もちろん自動詞だからと言って意図的に行えない動作だとは限らない—むしろ意図的に行う動作を表す自動詞も多い—が、それでも明らかに自動詞に偏っている点は興味深い。

ここでもう一つ重要なことを指摘しておきたい。それは < **be -ing** > が果たす役割についてである。< **be -ing** > は通常進行相、すなわち非完結相を示す。これは動作の開始時点や終了時点を意識せず、多くの場合は動作の途中の部分で「状態」として眺めるアスペクトである。言い換えると < **be -ing** > は基本的に「ある時点で動作が開始し、その後その動作がしばらく継続した」という「動作の継続状態」に焦点が当てられていると考えられる。さらに言うとも < **be -ing** > は多くの場合「動作の継続状態」に加えて「動作の終了時点を意識しないこと」に重きが置かれ、これにより「動作の終了」を明示する完結相と対立するアスペクトを提示する役割を果たす。これに対し **suddenly** が < **be -ing** > を修飾している場合は「動作の継続状態」に加え、「ある時点で動作が開始したことは間違いないが、その開始時点の主語（または話し手）は認識していない」という「動作の開始時点に対する認識の欠落」にも焦点が当たっているように感じられる。非完結相は「動作の開始時点を意識しないアスペク

ト」でもあるのだから、この点が非完結相が選ばれている理由の一つなのではないだろうか。この点をより詳しく見るために、次の(2)について考えてみよう。

(2) Suddenly I was jumping, yelling out as the flagstone beat my feet like a cudgel or stone cricket bat. (BNC: G02)

< be -ing >は、動作を行っている状態が少なくともある程度は持続できるような動詞に用いられる場合には進行相を表すが、jumpは一瞬で完了する動作を表すので“be jumping”は反復相 (iterative)、すなわち「何度も繰り返し跳ぶ状態」を表すのがふつうである。では(2)のIは「何度も繰り返し跳んだ」のだろうか。

この点について英語の母語話者2名（1名はイギリス人、もう1名はアメリカ人。因みに(2)はイギリスの小説から採られたものである）に質問してみた⁶。アメリカ人母語話者の回答は以下のようなものだった。「一度跳んだだけだったら“I jumped”と表現するだろう。それが“I was jumping”となっているのだからおそらく何度も繰り返し跳んだのだろう。これが suddenly で修飾されているのは少し奇妙な感じだが、『それまでの、跳びはねていなかった状態』から『繰り返し跳ぶ状態』への変化が突然だったということだろう。それに、繰り返し跳んだにせよその状態は短時間で終わった、という含みもあるのかもしれない。そういう理由から“suddenly I was jumping”と表現されたのだろう」。一方イギリス人母語話者の回答は「繰り返し跳んだのかもしれないし、一度跳んだだけかもしれない。どちらもあり得て、はっきりしない」というものだった。

ここから(2)の“was jumping”は「何度も繰り返し跳んだ」「一度だけ跳んだ」のいずれの解釈もあり得ると言ってよいと考えられる。そしてそれは日本語の次のような現象と似たものなのではないか。すなわち「落とす」のような

一瞬で完了する動作を表す動詞がテイル形（「落とす」ならば「落としている」）になると、(3a) に見るように反復相を表すのがふつうである。ところが「思わず」「我知らず」といった副詞相当語句と共起すると一度きりの動作を表しているという解釈も可能となる。(3c) の「殴っていた」は「一度だけ」「何度も」のいずれの解釈もあり得るだろうが、(3b) の「落としていた」はおそらく「一度だけ」の解釈に限定されるだろう。

- (3) a. 年の瀬の寺では僧侶たちが仏像のほこりを落としていた。
b. 衝撃的なニュースに私は思わず手に持ったかばんを落としていた。
c. 私は思わず友人を殴っていた。

ここで、「一度だけ」と「何ども」のいずれの解釈が正しいのかというのはさして重要なことではない。その動作が一度だけ行われたのか、それとも何ども繰り返されたのかは文脈にもよるし、それに何よりも文の表す事態の自然さに依存する。例えば (3b) であれば、ある人がかばんを手にはしているとして、そのかばんの数は1つと複数のどちらがより普通の、頻度の高いことであるか、あるいは複数のかばんを手にはしている人が何かに驚いてかばんを取り落とすとして、複数のかばんを次々と落とすというのはどれくらい自然なことであるのか、といったことから総合的に判断した結果 (3b) の「落としていた」は「一度だけ」の可能性が高いという結論が導かれるのだと考えられる。しかもそうした常識や文脈を加味しても「一度だけ」と「何ども」のいずれかに特定されず、いずれの解釈もあり得るという場合が多い。例えば「殴っていた」は文脈がなければ「何度か殴った」と解釈するのが自然であるから (3c) のような文であってもどちらかと言えば「何度か殴った」の意味で解釈される傾向があるかもしれない。しかし少なくとも筆者の感覚からすると「一度だけ殴った」という解釈も十分に成り立つと思われる。両者のうちのいずれか一方に決めることはおそらくできないし、どちらかが正しいのかは重要なこととは思わ

れない。

それよりも重要なのは「思わず」が動作主の非意図性を明示し、それが非完結相を示すテイル形と共起することにより、すでに述べたとおり、「動作の開始時点に対する認識の欠落」が注目される、言い換えると「いつ始めたのか記憶にないが、気づいたらその動作を行っている状況の中にいた」という含意が生じるということである。これは「動作の開始時点」と「すでに動作が始まっていることを認識した時点」とにずれがあり、その上で後者に焦点を当てることを意味するから、黒宮（2016）や本稿で議論してきた「状態変化」と「認識の変化」の区別という観点から眺めると後者、すなわち「認識の変化」を表している例だと言える。

日本語のこの「思わず～していた」という表現が < was [were] suddenly -ing > と似ていることはすでに指摘した通りだ。ここから類推して < was [were] suddenly -ing > にもこの日本語表現の持つ諸特徴が当てはまるのではないだろうか。< be -ing > は「動作の継続状態」に加え「動作の開始時点に対する認識の欠落」に焦点を当てる。もちろん「動作の継続状態」も含意されるのだから動詞が一瞬で完了する動作を表す場合には反復相だと解釈されやすい（上記アメリカ人母語話者のコメントを参照）が、必ずしも反復相だと解釈されなければならないわけでもない（上記イギリス人母語話者のコメントを参照）。いずれにせよ重要なのは「動作の開始時点は記憶にない」「気づいたら動作の継続状態の中にいた」ということに焦点が当てられている点で、これは明らかに「状態変化よりはむしろ認識の変化が突然であること」を示していると言える。

ここで反復相の解釈に関連して、アメリカ人母語話者から「一度跳んだだけだったら “I jumped” と表現するだろう」というコメントが寄せられたことについて改めて考えてみよう。

- (4) a. He was glaring at me suddenly. (= (1a))

- b. He glared at me suddenly.
- c. Suddenly I was jumping. (cf. (2))
- d. Suddenly I jumped.

(4b) は単に「彼は急に私をにらんだ」ということだろう。それと比べると (4a) は「彼は急に私をにらみだした」、つまり「その状態はその後もしばらく続いた」という含みがあるものと思われる。それと同じように (4c) には「しばらく跳ぶ状態が続いた」という含みがあると考えるのは自然であり、他方 jump は glare と異なり一瞬で完了する動作を表すので反復相だと解釈するわけである。これがもし一度跳んだだけなら (4d) のように表現されるはずだというのは納得のいく説明である。しかしイギリス人母語話者のコメントに従えば (4c) を「一度跳んだだけ」と解釈することも可能だという。ではその場合 (4d) との違いは何なのだろうか。

ここで思い出されるのは Comrie (1976:4) の次の一節である。

(5) Another way of explaining the difference between perfective and imperfective meaning is to say that the perfective looks at the situation from outside, without necessarily distinguishing any of the internal structure of the situation, whereas the imperfective looks at the situation from inside[.]

完結相は状況を外側から、客観的に眺める。(4d) の主語は一人称だが、それでも「跳び上がった私」とは別に「その状況を客観的に眺めている私」がいて、後者の視点からの表現が (4d) だと言える。jump は jump であって内部構造を持たない。開始から終了までが一つのものとして捉えられている。完結相はそのような認識を示す。

他方非完結相は状況を内側から、主観的に眺める。(4c) の原文は(2)であり、それによると足に激痛が走って思わず跳び上がったという状況である。お

そらく「痛い」と認識するより先に身体が反射的に反応し跳び上がっていたのだろう、一瞬の後に認識が追いついたときには身体はすでに跳び上がっている状態にあったことを表現している。jump が「開始」「途中の状態」「終了」という内部構造を持ったものとして認識されており、かつ、開始の時点は認識されていないこと、気づいたら跳び上がっている状態にあったことが示されている。このような動作主の主観的な認識を表現できるのは非完結相ならではだと言えよう。

以上から次のことが言えるのではないかと予想される。すなわち、動詞が表す動作を客観的に眺めるのであれば < be -ing > は、たとえ suddenly とともに用いられようとも、動作中の状態がある程度持続したことを表さねばならない。結果として、jump のように一瞬で完了する動作を表す動詞の場合の進行形 be jumping は反復相を表していることになる。他方、動詞が表す動作を書き手が動作主の立場に立って主観的に眺め、読者もまたそのような捉え方を受け入れるのであれば、< be suddenly -ing > は「動作の開始時点を認識していないこと」を強調する。結果として動作中の状態が持続したことを表す必要はなく、jump のように一瞬で完了する動作を表す動詞の場合であっても「動作が一度だけ行われた」という解釈を許容する。2人の母語話者の解釈のずれはこのように説明できるようではないだろうか。

このように < be suddenly -ing > は「認識の変化が突然であること」、つまり「すでに生じていた状態変化に突然気づくこと」を表すことが多いと言える。もっともこの用法も、上記の議論から（以下、状態変化を認識する人を「認識者」と呼ぶことにすると）「認識者が動作主である場合」と「認識者が動作主でない場合」とに分けて考えた方がよさそうだ。ここに、すでに軽く触れたが、「動詞の表す動作が意図的に行われるものかどうか」という点も重要であるので加味してまとめると次のようになろう。

- (6) a. 認識者が動作主で、動作が意図的に行われるものである場合

- b. 認識者が動作主で、動作が意図的に行われないものである場合
- c. 認識者が動作主でなく、動作が意図的に行われるものである場合
- d. 認識者が動作主でなく、動作が意図的に行われないものである場合

(6a) の場合 **suddenly** が共起することはほとんどないと思われる。誰かが何かを故意に行う場合、当人は意図的に、つまりあらかじめそれをしようと思った上で実行するのだから意外性はないはずであり、それを当人が「突然だ」と感じるというのはあまりにも不自然でありそうもないからである。強いて言えば誰かが突然何かをしようと思って、そう思った瞬間実行に移していた、という場合が該当するかもしれない。

(6b) の具体例が (4c) であるが、このような例は珍しい。「認識者が動作主である」ということは、ある人が何らかの行動を取ったが、当人はそれを意識しておらず、少し遅れて「我知らず」その行動をしていたことに突然気づいたということだから、具体例が少ないのも当然のことだ。

(6c, d) はいずれも「認識者が動作主でない場合」であるが、これは認識者の関与しないところで出来事が発生して状態変化が生じ、少し遅れて認識者が「いつの間にか」そのような状態変化が生じていたことに突然気づいたということだから、(6b) と比べこちらの方がはるかによくあることだと考えられる。また (6c) にせよ (6d) にせよ状態変化が認識者のあずかり知らぬところで発生しているという点で変わりはないため、認識者にとって両者の区別は重要ではないと言える。

では (6b) と (6d) との区別は明確かという点必ずしもそうではない。なぜなら主語が三人称であっても小説等では作者がその人物の内面から出来事を捉えて描くことがふつうにあるため、三人称の主語が動作主であり、かつ認識者でもあるということが十分にあり得るからである。しかもここに読者の解釈が加わると問題はさらに複雑化する。読者が事態を動作主の視点から捉える(言い換えると動作主が認識者だと捉える)か、あくまでも客観的に事態を眺

める（言い換えると物語の語り手が認識者だと捉える）かによって母語話者でも解釈に差が出ることは(2)ですでに確認したとおりだ。(2)の主語を **he** に変えたとしたら「何度も繰り返し跳んだ」という解釈の方が優勢になるだろうが、それでも「一度だけ」という解釈がまったくできなくなるわけでもないだろう。あるいは(1c)を例にとると、(1c)の表している状況を客観的に眺めれば「Lisa は突然ニヤニヤ笑いを始めた。頭も急に回りだした」と解釈されるが、Lisa の視点に立って「Lisa は思わずニヤニヤ笑いをしていた。頭もいつの間にか回り始めていた」と解釈することも可能であろう——とりわけ Lisa の頭脳が回転を始めたと認識するためには、読者は否応なく Lisa の視点に立たねばならないのだから。結局 (6b) と (6d) との区別はそれほどはっきりしたものではないと言える。それは言い換えると「物理的变化」と「認識の変化」のいずれが突然生じたのかに関する区別は多くの場合明確でないということを意味する。同時にまた、ニヤニヤ笑いや頭の回転がどこまで意図的に行えるものなのか—あるいは無意識にしまうのを意識によってどこまで止められるものなのか—を考えると、(6c) と (6d) との区別もはっきりしたものではないことが分かる。

逆に言うと、文章中に一人称代名詞が現れていたらそれは重要な手掛かりになる。読者は通常その人物の視点から事態を眺めるはずだからである。(2)で読者が動作主の視点から事態を捉え、「気づいたら跳び上がっていた」という解釈がしやすいのは動作主が一人称であるためである。一方 (1a) も(2)と同様非完結相が用いられている文ではあるが、こちらは読者が動作主の視点に立って「彼は我知らずにらみつけていた」と解釈することはあり得ない。なぜなら (1a) では主語が **he** であり、加えて **glare at** の対象が **me** なのであるから、状況は否応なくこの一人称の人物の視点から捉えられることになる。つまり、すでに述べたように、「彼は急に私をにらみだした」(**suddenly** は主に物理的变化を表す)、「彼が私をにらんでいることに突然気づいた」(**suddenly** は主に認識の変化を表す)のいずれかだということになる。この場合おそらく前者

が適切だと思われるが、正しい解釈は結局のところは文脈による。「彼が私をにらむ前の状態」を「私」が見ていたのなら前者が正しいということになろうし、見ていない状態でふと「彼」を見たらにらんでいることに気づいた、という状況であれば後者が正しいということになろう。

抽象的な議論が続いたので、ここで具体例をもう少し見ておこう。

- (7) a. She squirmed against me and suddenly we were kissing. (BNC: HR7)
 b. But suddenly in September everyone was talking about war.
 (BNC: G16)
 c. Her softened tone said she thought that this was very sweet of him, if a little unnecessary . . . and suddenly Tom himself was standing behind her and draping a light hand around her bare shoulders. (BNC: H9H)
 d. Suddenly the back of the Morris Minor is hanging over the cliff edge.
 (BNC: HRF)
 e. and suddenly she was listening for dogs (BNC: FU5)

(7a) は (6b) の例だと考えられるが、もしかすると (6a) の例だとも言えるかもしれない。しかし「突然その気になってキスしていた」というよりは「気がついたら二人はキスしていた」の方が自然な解釈のように思われる。換言すると *she* の方が積極的にキスをしてきた結果二人がキスをした状況を表しているように思われる。そしてもう一つ重要なことは、(7a) の非完結相は「キスしている状態の継続」よりも「いつキスを始めたか覚えていないこと」を強く示唆しているように感じられることである。つまり *suddenly* は物理的変化よりも認識の変化に重点が置かれていると言えよう。

(7b, c) は (6c) の例である。すでに見た (1a) も (6c) の例であるが、両者を比べると興味深い結果が得られる。(1a) ではおそらく「彼は急に私をにらみだした」という物理的変化の解釈が優勢だろうが、(7b) の *suddenly* は間

違いなく認識の変化を表している。(7b) の **everyone** は世間の人々ということだろうが、それぞれの人が戦争について語るのを同時に一斉に開始することは考えられないし、また一人の認識者がその全体を同時に知覚することも不可能だ。結局 (7b) は「気づいたらいつの間にか急に誰もかもが戦争の話をするようになっていた」という認識の変化を表した文だということになる。これは (7c) も同様だ。“**Tom himself was standing behind her**” というのは動作というよりはむしろ存在を表しており、これを **suddenly** が修飾しているということは「トムが自分の後ろに立っていることに彼女は突然気づいた」と、認識の変化として解釈すべきであろう。物理的变化が突然生じたという解釈は考えにくい。

(7d) は (6d) の例である。物理的变化・認識の変化のいずれの解釈も可能だろうが、どちらかというと後者ではないだろうか。物理的变化、すなわち「**Morris Minor** (自動車の車名のような) の車体の後部が崖から突き出てぶら下がる」という変化が突然生じたとしたならば、その勢いのまま車全体が崖から落下してしまうのではないか。したがって **Morris Minor** が崖からはみ出る変化はゆっくりとある程度時間を掛けて起こったのであって、**suddenly** は認識の変化、つまり「いつの間にか自動車が崖からぶら下がって落ちかけている状態であることに突然気づいた」ということを表しているのではないかというのが筆者の考えである。

(7e) は詩の一節である。“**listening to dogs**” ではなく “**listening for dogs**” なのだから、犬の鳴き声が聞こえているわけではなく、「聞こえないかと耳を澄ます」ということだろう。「彼女は突然、犬の鳴き声を聞きたくて耳を傾けだした」と考えると (6c) の例で、おそらくこの解釈でいいのだろうが、「彼女は突然、犬の鳴き声が聞こえないかと耳を澄ませている自分に気づいた」という認識の変化もニュアンスとして含まれているのかもしれない。この場合は (6b) の例ということになる。

以上からも分かるように、**suddenly** が物理的变化・認識の変化のいずれを

表すかは文脈に大きく依存すると言える。また文によってはいずれの解釈もあり得るということは、すでに述べた(2)に対するイギリス人母語話者のコメントからも見て取れる。

3

本稿をまとめると以下のようなになる。すなわち、黒宮 (2016) で見た < be + 形容詞 > を修飾している **suddenly** と比べると、< be -ing > を修飾している **suddenly** の方が「認識の突然の変化」を表しているとは判断される例が多い。その原因の一端は < be -ing > が非完結相を表すことにあると考えられる。非完結相は一般的には「動作の継続状態」と「動作の終了時点を意識しないこと」とに重点が置かれるが、「動作の開始時点を意識しないこと」もその機能に含まれており、< be suddenly -ing > はこの側面を強調すると考えられる。そして動作の開始時点が意識されていないということは物理的变化の瞬間を知覚していないということであるから、「突然」生じたのは認識者による認識の変化だということになる。認識の変化を表す **suddenly** が < be suddenly -ing > に多く見られるのはこのためであろう。

もっとも、逆に認識者が物理的变化の瞬間を知覚した場合には物理的变化・認識の変化のいずれもが生じるので、両者を厳密に区別することはできない。両者の区別は文脈にも大きく依存するし、また受け取る側が文の表している事態を客観的に眺めるか、それとも動作主の視点から事態を捉えて文意を解釈するかによっても違いが生じる。

(「**suddenly** 考 (3)」に続く)

注

- 1) この点については黒宮 (2016) を参照のこと。
- 2) これについては「**suddenly** 考 (3)」で取り上げる予定である。

- 3) 黒宮 (2016) (とりわけ注3) で触れたことの繰り返しになるが、ここでいう「完結相」「非完結相」とはそれぞれ **perfective**、**imperfective** のことである。「完了相」「未完了相」と呼ばれることもあるが本稿ではこの名称を採用する。
- 4) なお (1c) の引用箇所には (1b) に加えて “Suddenly Lisa was grinning from ear to ear.” という suddenly が < be -ing > を修飾している例が見られるが、こちらはランダムに抽出した578例には含まれていなかった。578例に含まれたのはあくまでも (1b) の箇所のみである。
- 5) 筆者は黒宮 (2016) の(12)で、状態変化を「物理的な状態変化」と「人間の内面における変化」とに分けることを提案したが、本稿のこの議論は黒宮 (2016) で述べた区別と関連している。「頭脳が回転し始める」というのは「人間の内面における変化」であるので、変化が生じた正確な時点を特定するのは困難なことがあると言える。
- 6) この点に関して、大阪学院大学の R.D. Logie 准教授および Jason A. White 講師にこの場をお借りして謝意を表したい。

引用文献

British National Corpus <http://www.natcorp.ox.ac.uk/>

参考文献

Comrie, Bernard (1976), *Aspect*, Cambridge: Cambridge University Press.

黒宮公彦 (2016)、「suddenly 考 (1)」、『大阪学院大学外国語論集』第72号、pp.1-17.

Vendler, Zeno (1967), “Verbs and Times”, in *Linguistics in Philosophy*, Ithaca, New York: Cornell University Press, pp.97-121.

On *suddenly*: Part 2

Kimihiko Kuromiya

This article proposes that the word *suddenly* has two senses, one which represents an instantaneous change of state, and the other describing a speaker's realization of a change of state that has already taken place before the utterance.

In Part 2 we will continue to verify the proposal above through observing some more sentences, taken from *the British National Corpus*, where *suddenly* modifies <be + Present Participle>.

大阪学院大学外国語学会会則

- 第1条 本会は大阪学院大学外国語学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大阪学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、外国語学、外国文学の研究を通じて学界の発展に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
1. 機関誌「大阪学院大学外国語論集」の発行
 2. 研究会、講演会および討論会の開催
 3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で外国語学、外国文学を専攻し担当する者
 2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の機関誌その他の刊行物の配布を受けることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選は2期までとする。
1. 会 長 1名
 2. 副 会 長 1名
 3. 庶務・編集委員 4名
- 第8条 会長は会員の中から選出し、総長が委嘱する。
副会長は会長が会員の中から委嘱する。
委員は会員の互選にもとづいて会長が委嘱する。
- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。
- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 会長は会務執行に必要なとき、会員の中から実行委員を委嘱するこ

とがある。

第12条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。

第13条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金その他の収入をもってあてる。

第14条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。

本連合に関する規程は別に定める。

第15条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第16条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認をうるものとする。

附 則

1. この会則は、昭和49年10月1日から施行する。
2. この会則は、平成3年4月1日から改正し施行する。
3. この会則は、平成13年4月1日から改正し施行する。
4. この会則は、平成24年4月1日から改正し施行する。
5. この会則は、平成25年4月1日から改正し施行する。

以上

大阪学院大学外国語論集投稿規程

1. 投稿論文（翻訳を含む）は外国語学、外国文学に関するもので未発表のものであること。
2. 投稿資格
 - イ. 投稿者は、原則として本会の会員に限る。
 - ロ. 会員外の投稿は役員会の承認を必要とする。
3. 原稿は次のように区分し、その順序にしたがって編集する。論説、研究ノート、翻訳、書評など。
4. 原稿用紙は、本学の200字詰用紙を横書きにし、枚数は原則として80枚を限度とする。

ワードプロセッサ使用の場合は、A4判用紙を使用し、1ページを35字×27行とし、16枚程度までとする。

外国語文の場合はA4判用紙を使用し、5,000語程度までとする。

論文本文が日本語文の場合は300語以内の外国語文の、また本文が外国語文の場合は900字以内の日本語文の、概要を付ける。

外国語による論文および概要は、投稿前に当該外国語母語話者によるチェックを受けることが望ましい。
5. 投稿論文の掲載の可否は、2名の査読者による査読結果に基づき編集委員会で判断する。
6. 発行は原則として、前期・後期の2回とし、6月・12月とする。年間ページ数は300ページ以内とする。
7. 抜刷は40部を無料進呈し、40部を超過希望の場合は編集委員会で超過費用を決定する。
8. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。

なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望する場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
9. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が、複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、平成29年4月1日から適用する。

以 上

大阪学院大学外国語論集執筆要領

1. 原稿は最終的な正本とする。校正の段階でページ替えとなる加筆をしない。
2. 欧文は1行あきにタイプすること。
3. 邦文原稿の挿入欧文は、タイプもしくは活字体で明瞭に書くこと。
4. できるだけ現代かなづかいと当用漢字を用い、難字使用の時は欄外に大書する。
5. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
6. 注はまとめて本文の末尾に置くこと。

インデックス番号は上つきとして通しナンバーとする。その他の書式については、会員が所属する学外の学会の規程に準ずるものとする。(例えば、英文原稿の場合は、*MLA Hand book for Writers of Research Papers* に準拠すること。)

7. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、本文中の挿入箇所を指示すること。説明文は別紙にまとめる。
8. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は厚手の台紙にはりつけて、希望の縮尺を記入すること。
9. 執筆者校正は3校までとし朱筆のこと。3校以前で校了してもよい。
10. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるのでくに注意されたい。

ア. 校正のさい、内容に大きな変更は認められないが、やむをえず行って組換料が生じたとき。

イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわる場合。

11. 原稿の提出期限は原則として9月末と3月末とする。
12. 原稿の提出先は編集委員あるいは図書館とする。
13. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し入れる。

以 上

執筆者紹介（掲載順）

長 岡 み ゆ き 国 際 学 部 教 授

金 文 姫 非常勤講師

黒 宮 公 彦 情 報 学 部 准 教 授

編 集 後 記

東京で生まれ育ち、関東大震災以後関西に転居した谷崎潤一郎は随筆「私の見た大阪及び大阪人」の中で「大阪人はアレでなかなか滑稽を解する。その点はやはり都会人で、男も女も洒落や諧謔の神経を持っていることは東京人に劣らない」と述べている。しかし、現代の私たちが抱く大阪人のイメージは、「東京人に劣らない」ばかりか、「日本一目立ちたがり屋でオモロイ人々」である。『京都ざらい』の著者井上章一は、このギャップの原因を大阪のテレビ局に帰する。大阪のテレビ局は準キー局としてのプライドから、東京のキー局が制作した番組に全面的に頼るのを潔しとせず、限られた制作費の中で自社で番組作りをしてきた。その際、オモロイことを話すことができる素人を前もって厳選し活用することで制作費を抑えたのである。その結果、「大阪人はオモロイ」というイメージが定着し、そしてそのイメージに合わすように大阪には実際オモロクでひょうきんな人々が溢れるようになったというのである。

「ポジションが人を育てる」や「経験が人を作る」という話はよく聞くが、上記の場合、「大阪人」という言葉のイメージがオモロイ大阪人を作ったと言える。それだけ言葉のイメージというのは大きな力を持つのである。しかも、言葉のイメージはちょっとした事がきっかけで変化する。最近、「付度」という言葉が、元々の「他人の心を推し量る」という中立的な意味に「保身や出世の為、便宜を図る」という意味が付け加わり、すっかり負のイメージがついてしまったように。言葉そのものや言葉を使った作品を研究することを生業とする私たちは、このことを重く受けとめておくべきだろう。

(Y. K.)

大阪学院大学外国語学会役員

会 長 川本 裕未

副 会 長 吉村 京子

編集・庶務委員 黒宮公彦・笹間史子・山口 修・林なおみ

大阪学院大学外国語論集 第73号

平成29年 6 月20日 印刷	編集発行所	大阪学院大学外国語学会
平成29年 6 月30日 発行	〒564-8511	大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号
	電話	(06) 6381-8434 (代)
	発行人	川本 裕未
	印刷所	大枝印刷株式会社
		吹田市元町28番7号
		電話 (06) 6381-3395 (代)

OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES

No. 73

A Reading of Alfian Sa'at's "The Electric Ghazals"
..... Miyuki Nagaoka 1

Marking Consonants: "A Vocabulary List of the Korean
Language (韓語覺書)" and the Japanese notations of the
Korean language in the late seventeenth-century Tsushima
Island Kim Moon-Hee 23

On *suddenly*: Part 2 Kimihiko Kuromiya 49

June 2017

THE FOREIGN LANGUAGE SOCIETY
OSAKA GAKUIN UNIVERSITY